

第17図 S I 3 出土遺物 (1)

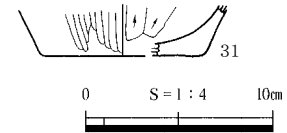
表10 S I 3 出土土器観察表

遺物No.	遺層 構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
23	S I 3 床直	弥生土器 台付壺	13.4 20.1	ほぼ完存	外面：ミガキ調整後赤色塗彩、肩部10条の多条平行沈線・波状文 内面：口縁部ミガキ、胴部ヘラケズリ・ユビオサエ、脚台部粗いミガキ	密 3mm以下の白色・灰色砂粒	外面：明赤褐色 内面：明黄褐色	良好	外面と口縁部内面に赤色塗彩
24	S I 3 床直	弥生土器 壺	10.4 10.4	1/2	外面：口縁部4条の平行沈線後ミガキ、胴部丁寧なナデ、脚台はケズリ出し 内面：口縁部ミガキ、胴部ヘラケズリ・下半は板状工具によるナデ	密 3mm以下の白色・灰色砂粒・雲母	外面：橙色 内面：橙色	良好	
25	S I 3 床直	弥生土器 甕	- △5.0	口縁部1/4 以下	外面：口縁部多条平行沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ミガキ、胴部ヘラケズリ	密 3mm以下の石英・白色・赤褐色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	不良	
26	S I 3 床直	弥生土器 甕	18.1 13.7	ほぼ完存	外面：口縁部5条1単位の波状文2段、肩部10条の多条平行沈線・5条1単位の波状文、頸部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	密 2mm以下の白色砂礫	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	不良	
27	S I 3 床直	弥生土器 甕	※15.5 △5.6	口縁部1/4 以下	外面：口縁部13条の多条平行沈線（5条1単位）、頸部ヨコナデ 内面：口縁部多条平行沈線、頸部上半ナデ後ミガキ、胴部下半ヘラケズリ	密 2mm以下の石英・灰色砂粒・雲母	外面：浅黄橙～橙色 内面：浅黄橙～橙色	良好	
28	S I 3 埋土	弥生土器 甕	※19.8 △8.0	口縁部1/4 以下	外面：口縁部多条平行沈線、頸部ヨコナデ、胴部上半貝殻による押引文 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ	密 3mm以下の石英多量	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄褐色	良好	
29	S I 3 埋土	弥生土器 甕	※15.2 △4.9	口縁部1/8	外面：口縁部は8条の多条平行多条沈線後ヨコナデ 内面：口縁部はヨコナデ後、部分的にミガキ、体部はヘラケズリ	密 1～2mmの白色・灰色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	内外面部分的に赤色塗彩残存
30	S I 3 埋土	弥生土器 甕	- △5.1	口縁部 1/10以下	外面：口縁部上半ヨコナデ・下半平行沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ	密 3mm以下の灰色・橙褐色砂粒・雲母	外面：浅黄色 内面：浅黄色	不良	
31	S I 3 埋土	弥生土器 底部	※底径8.6 △2.7	1/7	外面：ヘラミガキ、底面ケズリ後ナデ 内面：ヘラケズリ	密 径2mm以下の砂粒	外面：にぶい黄～灰黄色 内面：にぶい黄褐色	良好	

表11 S I 3 出土石器観察表

遺物No.	出土位置	層位	器種	石材	法量				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
S14	S I 3	埋土	石鏃	無斑品安山岩	1.9	1.3	0.4	0.6	基部欠損
S15	S I 3	床直	台石	安山岩	△23.3	7.7	21.0	4540.0	上面赤色顔料付着

時期 埋土下層～床面直上出土土器は清水編年V-3～VI-1様式に比定されることから、本遺構は弥生時代終末期に廃絶されたものと判断される。



第18図 S I 3 出土遺物(2)

S I 4・5

位置 S I 4とS I 5は、Q6グリッド内、標高71.0mの丘陵平坦面に位置する。S I 4は、SK64、S I 5を壊している。

調査の経過 重機による表土剥ぎ後、第V層褐色土の精査中に東西7m、南北6mの範囲に渡って暗褐色土の楕円形プランを検出した。当初から2棟を予想してサブトレンチを設定し、掘り下げを行った。底面から壁溝を確認したため、竪穴建物跡と判断し調査を実施した。

S I 4 (第19・21・22図、表12・14・15、PL.5・31・32・41)

規模と形態 平面形は隅丸五角形を呈する。規模は、長軸6.3m、短軸5.9m、床面積は25.4㎡を測る。当遺構はS I 5の2/3以上を壊して建てられている。S I 5はVII層を床面としており、S I 4の床面は、そこから5cmほど掘り下げ作られている。

検出したピットは計13基で、そのうちP1～P5が主柱穴と考えられる。柱穴間距離はP1-P2から順に2.3m、3.1m、2.8m、3.5m、2.5mである。P6は中央ピットで、周囲に地山削り出しの周堤を持つ。幅15～30cm、高さは約3cmで、周堤の内側に被熱痕跡はみられなかった。P7～P13は、主柱穴と比べると径が狭く浅いため、建物を構成する柱穴ではないと考えられる。その他床面の破線で図示したピットはS I 5のピットで、北西側と南東側のピット埋土上面には、貼床が施され踏みしまっていた。壁面には、断面U字状で幅5～20cm、深さ5cm以下の壁周溝が全周している。またP1の北西側で、幅7～15cm、深さ5cmほどの屋内溝も検出した。

埋土 埋土はピット内も含めて15層に分層できた。検出面からピット底面まで一連の堆積を観察できたP1では、柱痕跡は認められず、床面上の④層がピット内まで入り込んでいる状況が確認できた。その下層⑩・⑫層はブロック状の地山土を多く含む土で、本来柱を埋め固めていた土が崩落したものと考えられる。他のピットの埋没状況でも同様のことが言える。これは建物廃絶後柱が抜き取られ、その後自然に埋没していったことを示唆していると判断される。

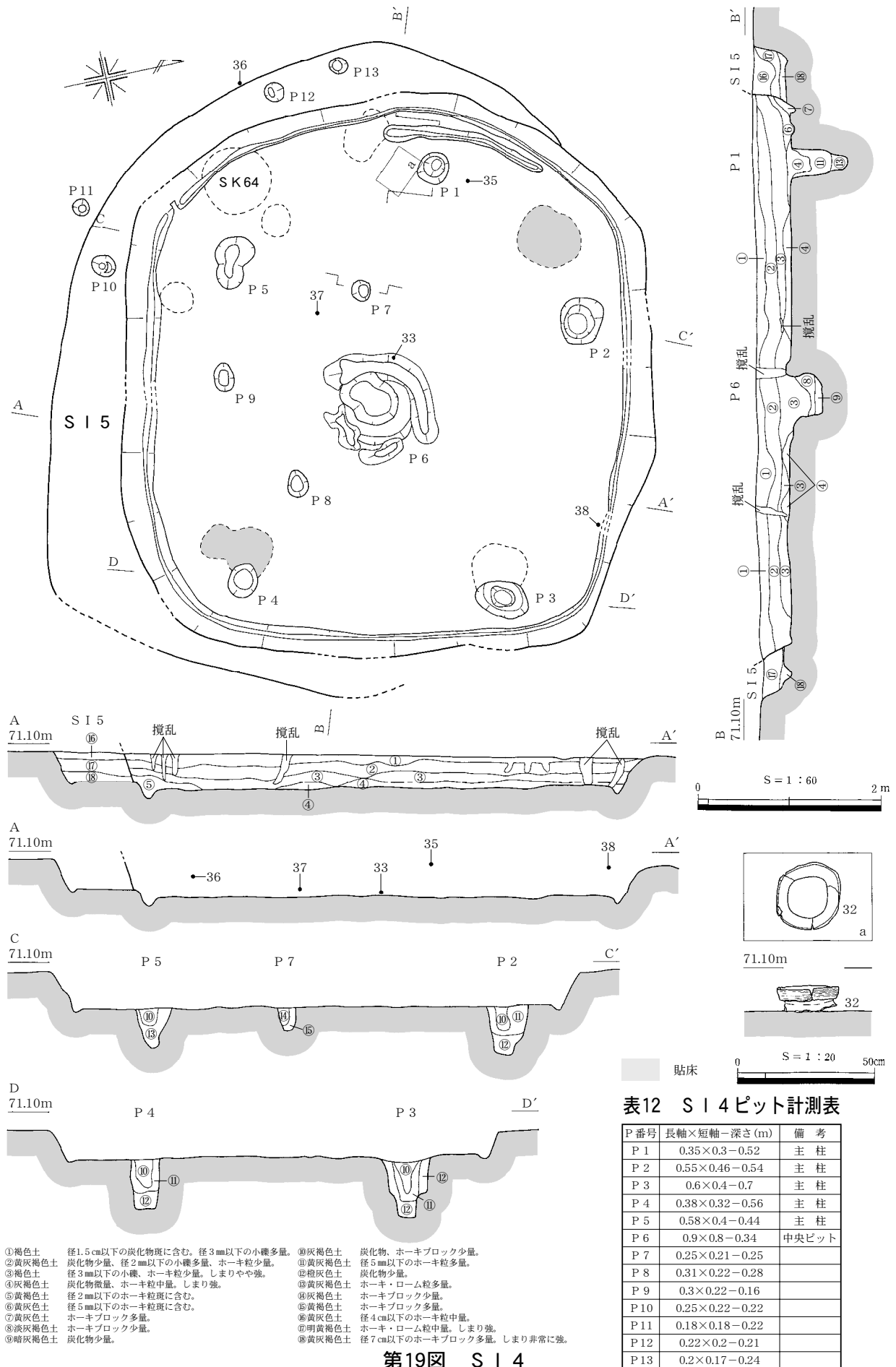
出土遺物 遺物は小片が多かった。図化できたものに甕や壺などがみられる。床面から32・33、③層から37、②層から磨石S16、その他①層および周辺から34・35・36、須恵器胴部片38などが出土した。P1の南側で出土した32は完存した甕の口縁部で、直立した状態で出土した。

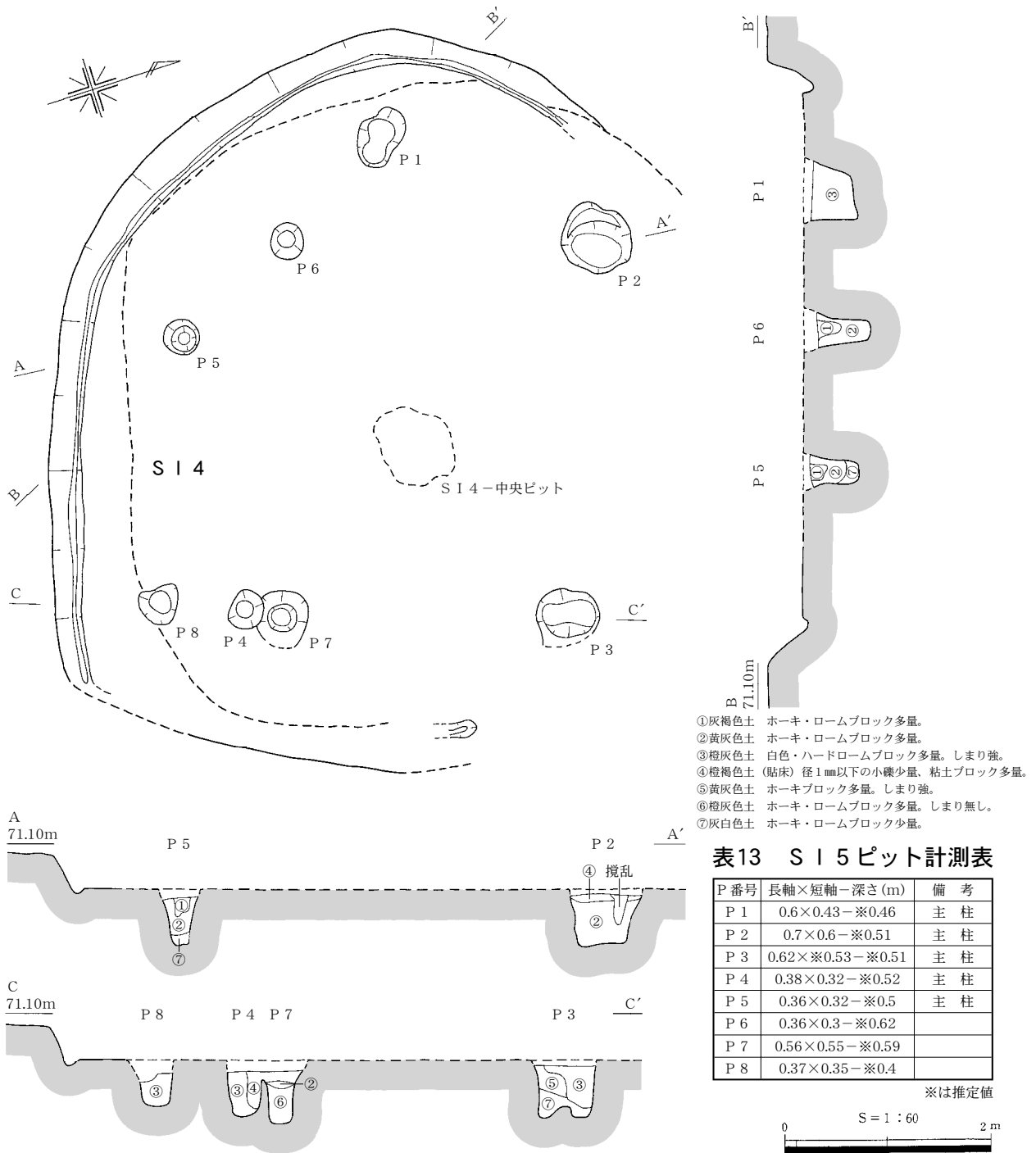
時期 床面出土遺物は清水編年V-3様式に比定されることから、弥生時代後期後葉に廃絶された竪穴住居跡と考えられる。

S I 5 (第20図、表13、PL.5)

規模と形態 平面形はS I 4と同じく隅丸五角形を指向すると考えられる。規模は、長軸7.1m、短軸推定約6.3m、床面積は推定で34.0㎡を測り、残存していれば当遺跡内最大の規模であった。

検出したピットは計8基で、そのうちP1～P5が主柱穴と考えられる。柱穴間距離はP1-P2から順に、2.4m、3.5m、3.3m、2.7m、2.6mを測る。中央ピットは、想定される位置がS I 4の中央ピットと重なることから、S I 4で再掘削され消失した可能性がある。P6やP7は規模と位置から、上屋に関連する柱穴の可能性はある。P6はP1-P5の主柱軸線の間中に位置することから



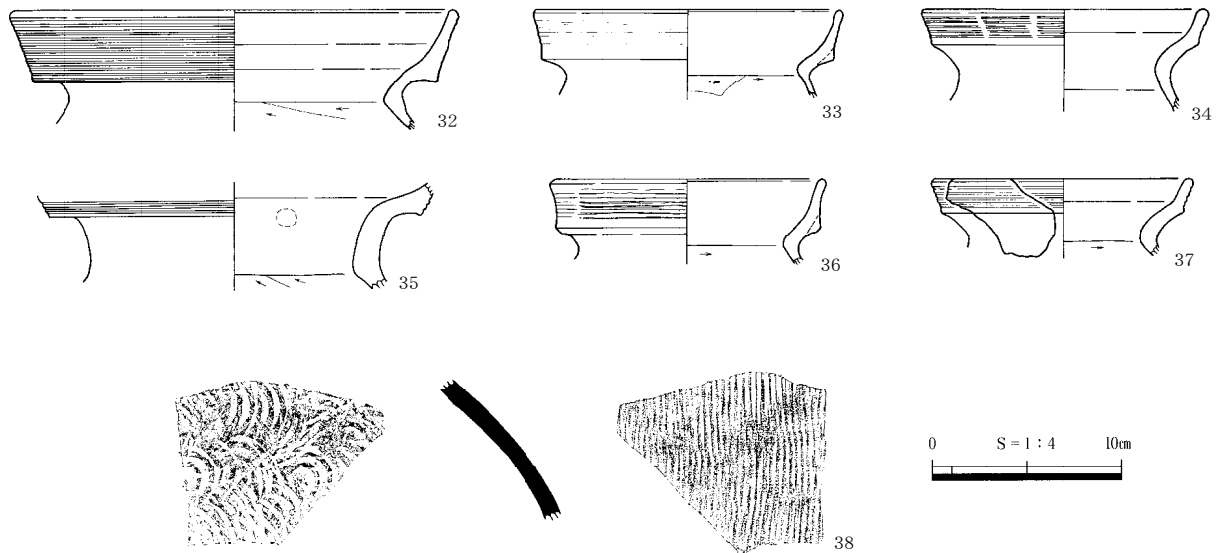


第20図 S15

補助柱穴と考えられる。P7は、P4との切り合いや埋土の状況から、構築段階当初の主柱穴であった可能性がある。しかし何らかの理由で埋め戻され、P4に柱が据え直されたと推測される。

壁面には断面U字状で幅5~15cm、深さ7cm以下の壁溝を検出した。ただし当遺構は削平が著しいため、残存する壁下でのみの検出である。

埋土 埋土は床面までが⑩~⑱層(SI4土層断面図中に記載、第19図)の3層、ピット内埋土は①~⑦層まで分層できた。⑩~⑱層の堆積は、いずれもブロック状の地山土が多く含まれ、下層ほどブロックの径が大きく、全体的に非常にしまった状態であった。ピット内埋土も、柱痕跡などはまったく認められず、ブロック状の地山土がかなり多く、しまっていた。P2・P7ではさらに貼床も検



第21図 S I 4 出土遺物 (1)

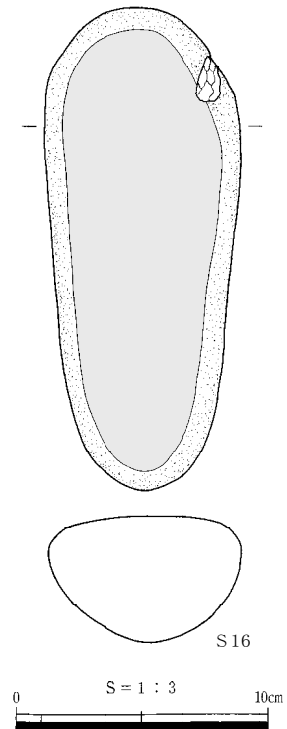
表14 S I 4 出土土器観察表

遺物№	遺層 構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
32	S I 4 床直	弥生土器 甕	23.3 △6.3	1/6	外面：口縁部11条の多条平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	密 3mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙色～明黄褐色 内面：にぶい黄褐色～明黄褐色	良好	
33	S I 4 床直	弥生土器 甕	※16.0 △4.6	口縁部1/6	外面：口縁部多条平行沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ヘラケズリ	密 2mm以下の白色砂粒	外面：橙色～にぶい橙色 内面：灰黄色～にぶい黄色	良好	
34	S I 4 2層	弥生土器 甕	※14.7 △5.4	口縁部1/8	外面：口縁部5条の多条平行沈線、頸部ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、胴部ヘラケズリ	密 1mmほどの白色砂粒	外面：橙～褐灰～にぶい褐色 内面：橙～にぶい褐色	良好	
35	S I 4 1層	弥生土器 壺	— △5.6	口縁部1/7	外面：口縁部3条の平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	密 5mm以下の白色・灰色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	
36	S I 4 2層	弥生土器 甕	※14.5 △4.4	口縁部1/7	外面：口縁部8～9条の多条平行沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	密 2mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙～灰黄褐色 内面：褐灰色～明黄褐色	良好	
37	S I 4 3層	弥生土器 甕	※13.9 △4.3	口縁部1/8 以下	外面：口縁部5条の多条平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	密 1mmほどの白色砂礫	外面：にぶい橙～灰褐色 内面：にぶい黄橙～灰褐色	良好	口縁部に煤付着
38	S I 4 1層	須恵器 甕	— △7.5	胴部1/10 以下	外面：平行タタキ 内面：同心円状当具痕	緻密 1mm以下の白色砂粒少量	外面：灰色 内面：灰色	良好	

出された。

S I 4とS I 5の状況から、平面形態および支柱配置は両遺構とも五角形を指向し、S I 5の埋土からは意図的な埋め戻し行為が認められた。これらのことから、両者の関係はS I 5→S I 4への建て替えと判断される。建て替えは全体的に北東側へずらして行われ、さらに建物規模の縮小化も図られている。建て替えの過程は、①S I 5の解体に伴い柱が抜き取られる。②S I 4の建物位置がS I 5から北東側へ全体的にずらして設定され、床面が新たに掘り下げられる。③S I 5のピットが埋め戻され、しまりの悪い箇所には貼床が施される。④柱穴が新たに掘削される。なお、③の埋め戻し土に関して、ピット内へは②の床面掘削の際に出た排土(VII層)が充填されたと考えられる。しかし残存するS I 5の床面を埋めS I 4の壁面を作るには十分ではなく、周辺の土も充てられた可能性が考えられる。

出土遺物と時期 S I 5で遺物はまったく出土しなかったが、埋土の状況から、廃絶後間をおかずにS I 4へ建て替えが行われてい



第22図 S I 4 出土遺物 (2)

表15 S I 4 出土石器観察表

遺物№	出土位置	層位	器種	石材	法量				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
S16	S I 4	2層	磨石	安山岩	19.1	4.9	7.8	960.0	表面磨面

る。S I 4が弥生時代後期後葉に相当する竪穴住居跡であることから、S I 5もこの時期内に比定される竪穴住居跡と考えられる。（岩井）

S I 6（第23～26図、表16～18、写真11、PL.6・33・41）

位置 L・M7～8グリッドにまたがっており、北へ向かってわずかに下る標高68.8～69.2mの丘陵平坦面に位置する。同時期のS I 8が約9m南東側に、SK84が約1m北東側に近接する。

調査の経過 V層上面を精査する過程で径約6mの範囲に広がる攪乱土を除去したところ、その下でレンズ状に堆積した黒褐色土の円形プランを検出した（写真11）。サブトレンチを設定して掘り下げたところ（A-A'・B-B'ライン）、ミニチュア土器51や円礫が出土し、複数のピットを確認したことから、弥生時代の竪穴住居跡であると判断して調査を進めた。

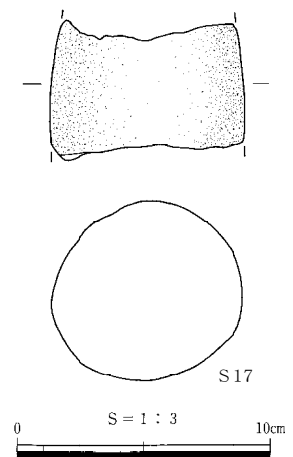
S I 6は竪穴の拡張を伴う建替えが行われており、拡張後の新しい建物跡をS I 6 b、拡張前の古い建物跡をS I 6 aとし、記述することとする。

・S I 6 b

規模と形態 平面形は径約7.1mを測る不整な円形を呈し、床面積は31㎡である。壁高は南壁で最大66cmを測る。基本的にⅦ層が床面となるが、P1～P11～P3を結ぶ北東コーナー付近には貼床が施されている。床面南側の大半はS I 6 a床面を継続して使用している。S I 6 bに伴うピットを計19基検出しており、このうち壁際に配されたP1～P7が支柱穴と考えられる。柱穴間距離はP1-P2間→P7-P1間の順に2.8m、2.9m、2.5m、2.7m、2.5m、2.6m、2.6mで、P1～P3間がわずかに広い。P9は中央ピットである。支柱穴以外のピットについては、竪穴拡張後の貼床を掘り込むこと、埋土が竪穴下層埋土と同様であることからS I 6 bに伴うと判断したが、個々の機能は不明である。

壁溝は支柱穴に切られる以外は全周しており、断面U字状を呈し、幅10～20cm、深さ5～10cmを測る。P2付近の北東壁沿いは埋土と誤認して掘り下げており、検出できなかった。壁溝南東・南西コーナーはS I 6 b拡張時に掘り直されているが、南壁付近は再利用している。床面に36×27cmの範囲で不整形を呈す焼土面が1箇所形成されているが、6 bに伴うものかどうか明確でない。

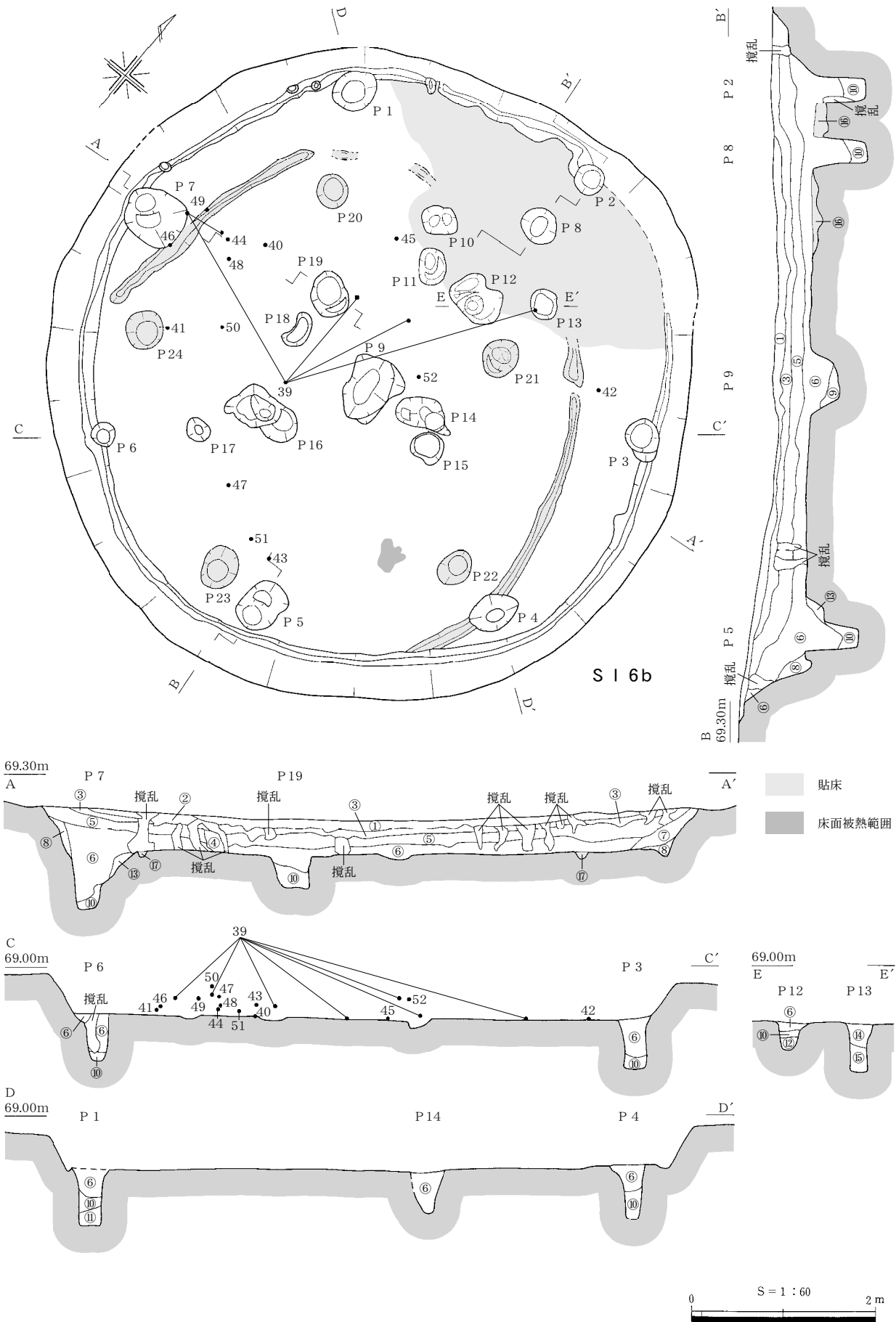
埋土と遺物の出土状況 ⑤層以下の下層堆積後に一旦埋没が止まって窪地となり、黒褐色～灰褐色系の①～④層が順次堆積していったと想定される。本住居は柱が抜き取られた後、床面および開口状態にある各ピットが⑥層により埋没している。ただ、⑤層と⑥層は色調にわずかな差が認められるがほぼ同質で、床面直上（⑥層）出土土器と⑤層出土土器で接合するものもあることから、竪穴下半（⑤層以下）は人為的に埋め戻されたと考えられる。貼床⑩層には床面と同じⅦ層ブロックを多量に含む土を用いており、粘性・しまりは強くない。また、拡張に伴い不必要となったS I 6 aの柱穴および壁溝は基盤層Ⅶ・Ⅸ～Ⅺ層ブロックを含む粘性・しまりの



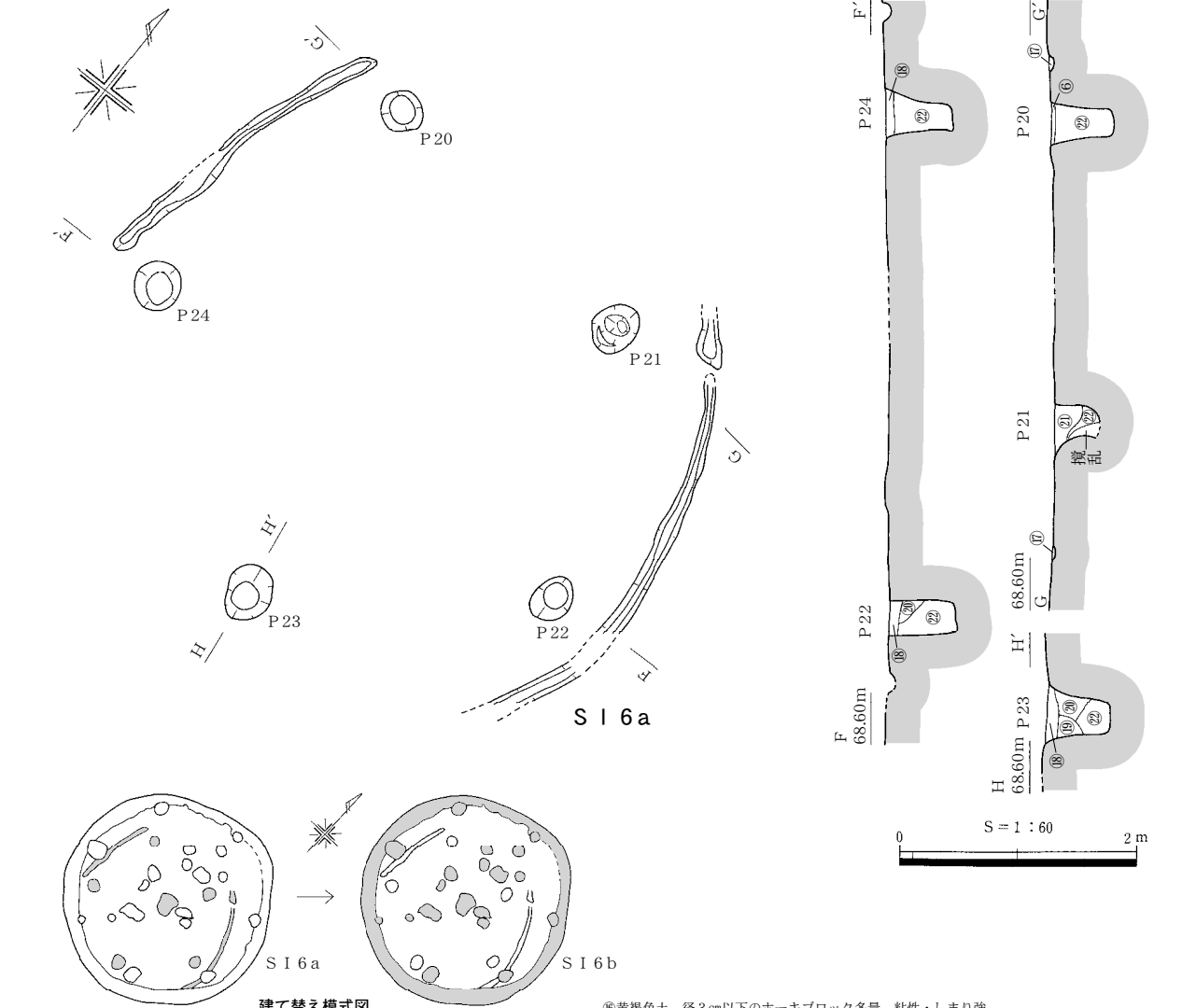
第23図 S I 6出土遺物(1)

表16 S I 6出土石器観察表

遺物No.	出土位置	層位	器種	石材	法量				備考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
S17	S I 6	6層	磨製石斧	安山岩	△5.5	7.1	7.2	330.0	先端・基部折損



第24図 S I 6 (1)



- ①黒褐色土 径5mm以下の小礫含む。粘性・しまり強。
- ②暗灰褐色土 径1cm以下の炭化物、径5mm以下の小礫・ロームブロック少量。
- ③灰褐色土 径5mm以下の炭化物・小礫・黄色粒少量。粘性・しまり強。
- ④灰褐色土 径5mm以下の炭化物・ロームブロック含む。粘性強・しまり弱。
- ⑤褐色土 径5mm以下の炭化物・小礫少量、径1cm以下のホーキ粒微量。粘性・しまり強。
- ⑥暗褐色土 径3mm以下の炭化物・黄色粒、径5cm以下のホーキブロック少量。粘性・しまり強。
- ⑦暗褐色土 径5mm以下の炭化物、径2mm以下のホーキ粒多量。粘性・しまりやや強。
- ⑧淡褐色土 (壁面崩落土) 径5mm以下の小礫微量、径2mm以下のホーキ粒少量。
- ⑨暗褐色土 径3mm以下のホーキ粒・白色ローム粒少量。粘性・しまり弱。
- ⑩褐色土 径3cm以下のホーキブロック多量。しまりやや強。
- ⑪褐色土 径5cm以下のホーキブロック、径2cm以下のハードロームブロック含む。しまり強。
- ⑫淡黄褐色土 ホーキブロック・ATブロック・ハードロームブロックの混合土。粘性・しまり強。
- ⑬黄褐色土 径1cm以下のホーキ粒少量。
- ⑭暗褐色土 径3mm以下の炭化物・小礫少量。粘性強・しまり弱。
- ⑮褐色土 径3mm以下の小礫、径3cm以下のホーキブロック少量。粘性強・しまり弱。

- ⑯黄褐色土 径3cm以下のホーキブロック多量。粘性・しまり強。
- ⑰淡褐色土 径2mm以下のホーキ粒少量。粘性・しまり強。
- ⑱淡褐色土 径2mm以下の炭化物、径5mm以下の白色ローム・ハードローム粒、径2cm以下のホーキブロック含む。粘性・しまり強。
- ⑲淡褐色土 径2mm以下の炭化物、径5mm以下の小礫微量、白色ローム、ハードローム含む。粘性・しまり強。
- ⑳褐色土 径1cm以下の小礫、ホーキブロック少量。粘性強・しまり弱。
- ㉑暗褐色土 径5mm以下の炭化物・小礫、径1cm以下のホーキ・AT粒含む。粘性・しまり強。
- ㉒褐色土 径5cm以下のホーキブロック多量、5mm以下のAT・ハードローム少量。粘性・しまり強。

第25図 S I 6 (2)

強い土で埋め戻されていた。

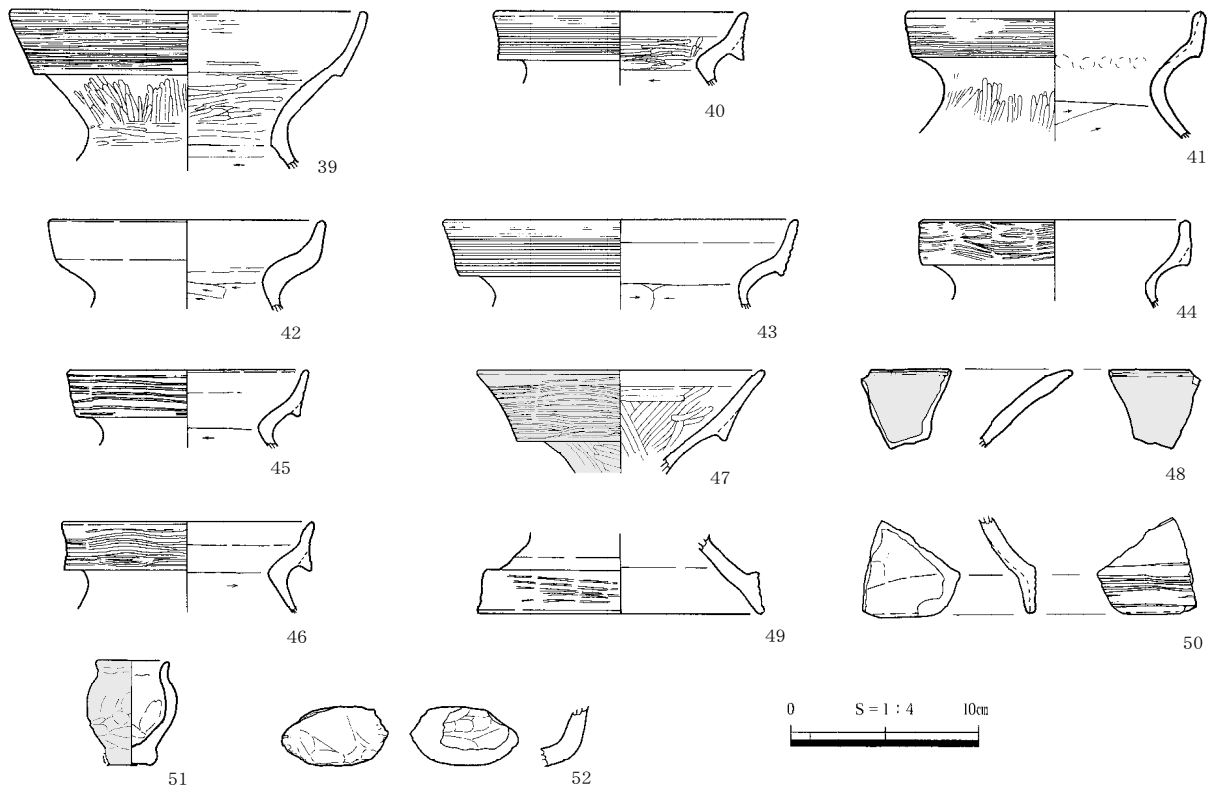
遺物は主に⑤・⑥層で出土しており、埋め戻しの過程での混入品と考えられる。①・③層には須恵器が伴うことから、住居廃絶後埋没までに一定期間を有していることが分かる。

・ S I 6 a

規模と形態 周壁の大半を拡張によって失っているが、床面に残存する壁溝および柱穴から推定される平面形は長軸5.4m以上×短軸5.3m以上を測る五角形で、床面積は21㎡である。S I 6 aに伴うピットはP 20～24

表17 S I 6ピット計測表

P番号	長軸×短軸-深さ(m)	備考
P 1	0.5×0.42-0.63	6 b主柱
P 2	0.34×0.34-0.53	6 b主柱
P 3	0.48×0.38-0.54	6 b主柱
P 4	0.56×0.4-0.58	6 b主柱
P 5	0.58×0.44-0.57	6 b主柱
P 6	0.27×0.27-0.53	6 b主柱
P 7	0.68×0.6-0.64	6 b主柱
P 8	0.41×0.36-0.53	
P 9	0.75×0.62-0.42	中央ピット
P 10	0.38×0.32-0.22	
P 11	0.4×0.32-0.24	
P 12	0.6×0.45-0.32	
P 13	0.34×0.28-0.54	
P 14	0.64×0.33-0.49	
P 15	0.35×0.31-0.08	
P 16	0.8×0.42-0.51	
P 17	0.28×0.26-0.28	
P 18	0.41×0.18-0.35	
P 19	0.5×0.39-0.37	
P 20	0.36×0.35-0.53	6 a主柱
P 21	0.46×0.38-0.5	6 a主柱
P 22	0.42×0.33-0.57	6 a主柱
P 23	0.47×0.38-0.55	6 a主柱
P 24	0.44×0.4-0.57	6 a主柱



第26図 S I 6 出土遺物 (2)

表18 S I 6 出土土器観察表

遺物No.	遺層 構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
39	S I 6 5~6層	弥生土器 壺	※18.0 △8.0	口縁部1/4	外面：口縁部只数段線による14~15条の多条平行沈線、頸~肩部ヘラミガキ 内面：口縁部ヘラミガキ後ナデ、頸部上半ヘラミガキ・下半ヘラケズリ	密 2mm以下の白色・赤褐色 砂粒、0.5mm以下の黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	内外面一部赤色 塗彩痕
40	S I 6 床直	弥生土器 甕	※12.8 △3.8	口縁部1/8	外面：口縁部多条平行沈線後上端ナデ消し、頸部ココナデ 内面：口縁部上半ナデ・下半~頸部上半ミガキ、頸部下半ヘラケズリ	密 2mm以下の白色砂粒	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	良好	口縁部外面煤付着
41	S I 6 5層	弥生土器 壺	※15.4 △6.5	口縁~肩部 1/6	外面：口縁部只数段線による8条の多条平行沈線、頸部ナデ、肩部ヘラミガキ 内面：口縁部ココナデ、頸部ナデ・指頭圧痕、肩部以下ヘラケズリ	密 1~2mmの白色・赤褐色 砂粒、0.5mm以下の黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	
42	S I 6 6層	弥生土器 甕	※13.8 △4.8	1/4	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケズリ	密 2mm以下の白色砂粒	外面：明橙色 内面：明橙色	良好	
43	S I 6 6層	弥生土器 壺	※18.2 △4.6	口縁部1/6	外面：口縁部多条平行沈線後上端ナデ消し、頸部ココナデ 内面：口縁部ココナデ、頸部ヘラケズリ	密 1~2mmの白色・赤褐色 砂粒、0.5mm以下の黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	
44	S I 6 6層	弥生土器 甕	※13.4 △4.3	口縁部1/4	外面：口縁部8条の多条平行沈線、頸部ココナデ 内面：ナデ	密 1~2mmの白色砂粒、1.0 mm以下の黒色・橙褐色砂粒	外面：茶褐色 内面：橙色	良好	外面煤付着
45	S I 6 6層	弥生土器 甕	※12.4 △4.0	口縁部1/6	外面：口縁部6~7条の多条平行沈線、頸部ココナデ 内面：口縁部ココナデ、頸部以下ヘラケズリ	密 2mm以下の白色・黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	外面煤付着
46	S I 6 6層	弥生土器 甕	※12.8 △4.6	口縁部1/4	外面：口縁部7条の多条平行沈線、頸部ココナデ 内面：口縁部ココナデ、頸部以下ヘラケズリ	密 1~3mmの白色砂粒・石英	外面：灰褐色 内面：灰白色	良好	口縁部外面煤付着
47	S I 6 5層	弥生土器 器台	※14.6 △5.5	受部1/4	外面：口縁部14~15条のクシ状工具多条平行沈線、受部ヘラミガキ後ナデ 内面：ヘラミガキ後上端ナデ	密 1~2mmの白色砂粒、0.5 mm以下の黒色・橙褐色砂粒	外面：灰白色 内面：灰白色	良好	外面赤色塗彩
48	S I 6 6層	弥生土器 器台	- △4.2	口縁部 1/10以下	外面：ナデ 内面：ヘラミガキ後ナデ	密 1mm以下の白色砂粒	外面：灰白色 内面：灰白色	良好	内外面赤色塗彩
49	S I 6 5層	弥生土器 脚部	※14.8 △4.2	脚部1/4	外面：裾部3~5条の擬凹線、脚部ナデ 内面：ナデ	密 2mm以下の白色・赤褐色 砂粒、0.5mm以下の黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	
50	S I 6 1層	弥生土器 脚部	- △5.1	脚部1/10 以下	外面：ナデ、裾部平行沈線 内面：脚部ヘラケズリ後ナデ、裾部ナデ	密 2mm以下の白色砂粒、0.5 mm以下の黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	
51	S I 6 6層	弥生土器 ミニチュア土器	3.6 5.7	4/5	外面：ナデ・ユビオサエ 内面：ナデ・ユビオサエ	密 1mm以下の白色砂粒、雲母	外面：黒褐色 内面：灰褐色	良好	外面赤色塗彩痕
52	S I 6 3層	弥生土器 ミニチュア土器	- △3.2	1/4	外面：ナデ・ユビオサエ 内面：ナデ・ユビオサエ	密 1mm以下の白色砂粒	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	良好	

で、すべて支柱穴である。中央ピットの有無については明確にできないが、位置的にP 8でも矛盾はなく、S I 6 a・bで中央ピットを継続利用していた可能性も考えておきたい。柱穴間距離はP 20-21間から順に、2.6m、2.4m、2.6m、2.7m、2.6mである。壁溝は北側を除けば概ね遺存しており、幅9~15cm、深さ6cm以下のものであったと推定される。

埋土と遺物の出土状況 柱穴および壁溝は基盤層ブロックを含む粘性土で埋め戻されている。特にP 22~24は粘性・しまりの強い㊸層を蓋状に貼り付けている。柱穴内から遺物は出土していない。

出土遺物 39は壺で、外面には赤彩痕が認められる。40~46は甕で、口縁帯が直立する40・44・46、外傾する41~43・45がみられ、40・43は外面の多条平行沈線をナデ消す。47・48は器台受部で、48は内外面ナデ調整後赤彩する。49・50は脚台である。51・52はミニチュア土器で、51は素口縁

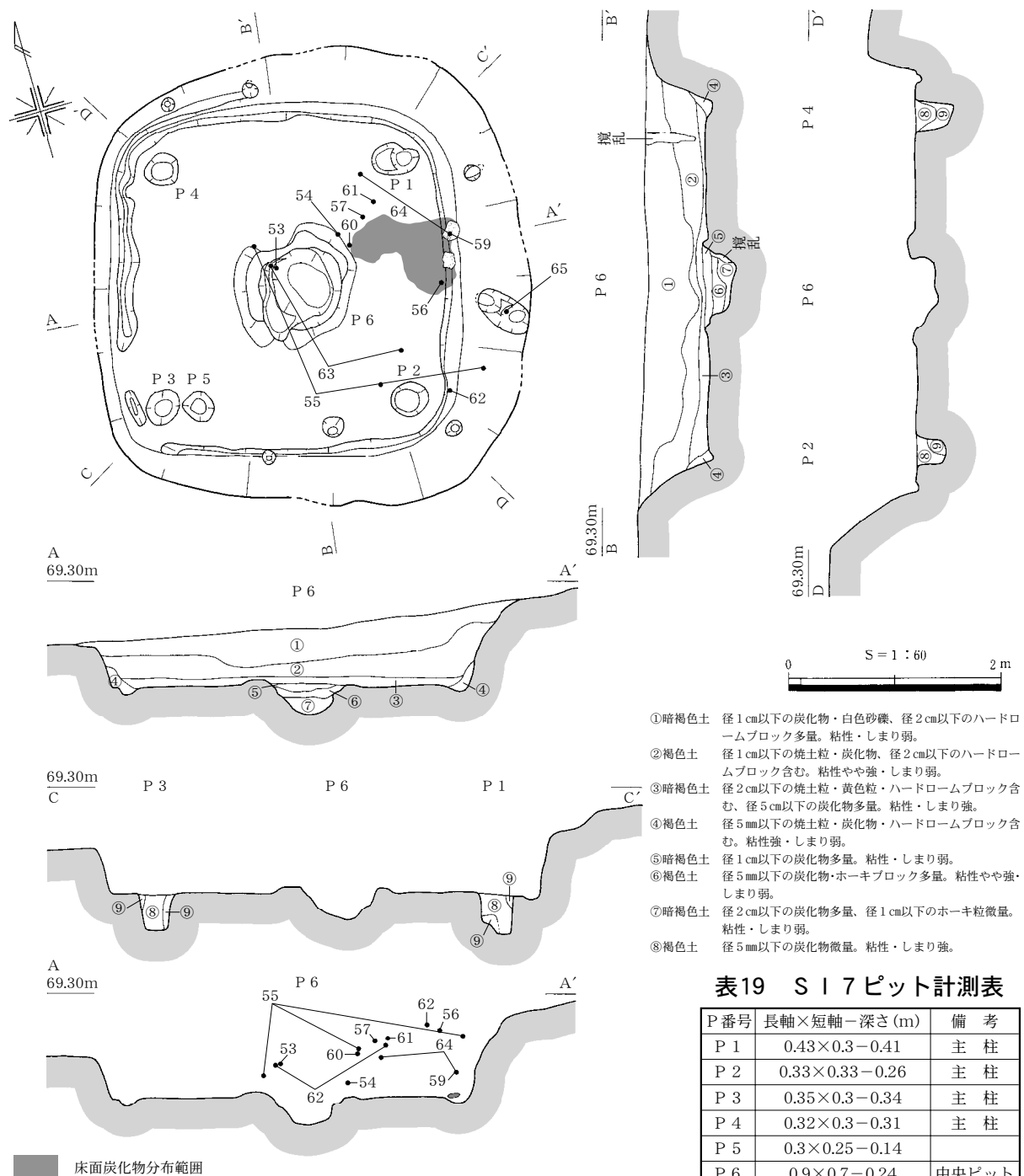
の壺形を呈し外面に赤彩痕が残る。S17は安山岩製の磨製石斧破片である。

時期 出土土器は清水編年V-3様式に比定され、S16bは弥生時代後期後葉に廃棄されたと考える。S16bはS16aの壁体・壁溝を再利用して拡張している点で、すぐに建替えが行われたことが窺えられ、S16aも周辺遺構の状況からすれば後期後葉のものである可能性が高い。（高尾）

S17（第27・28図、表19・20、PL.7・33・34）

位置 O9グリッド、東山やや南寄りの谷部に面した標高約69mの緩斜面上に位置する。

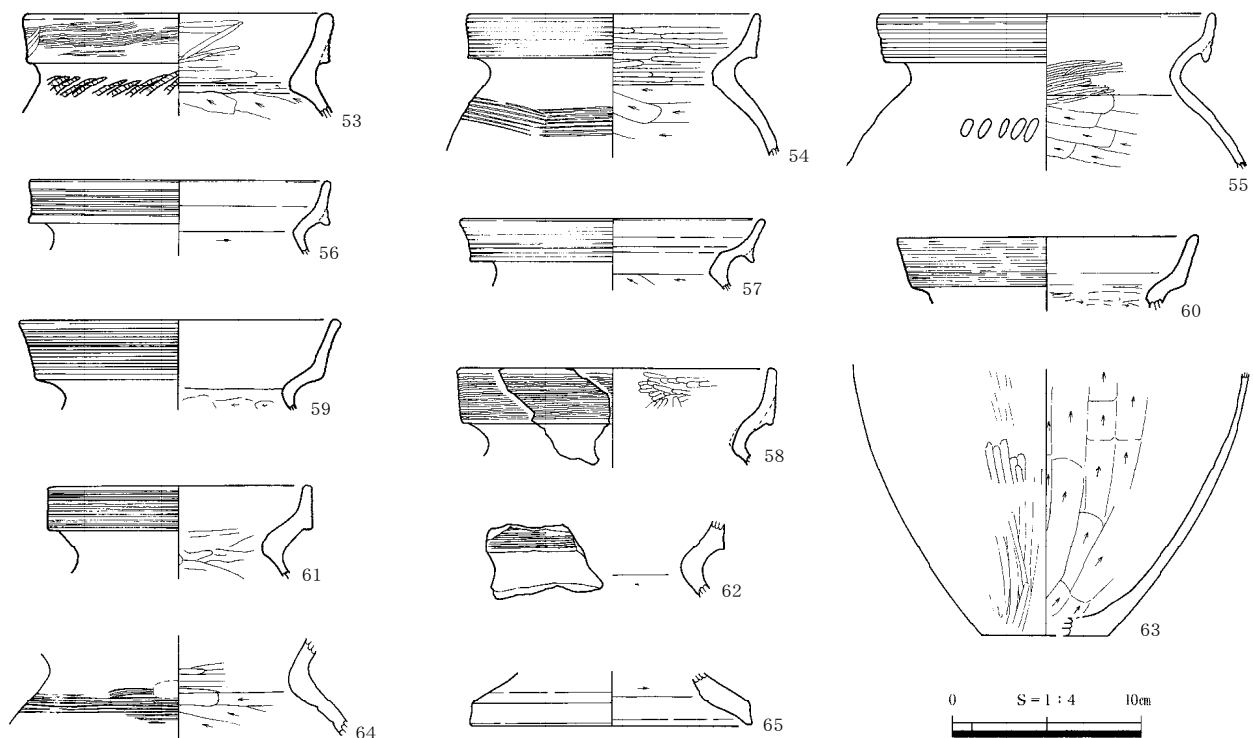
調査の経過 IV層褐色土の精査中に約4×4mの範囲にわたって炭化物混じりのやや濁った暗褐色のプランを検出した。東西方向にサブトレンチを設定し、掘り下げを行ったところ、ピットと側壁・



第27図 S17

壁溝が確認されたため、竪穴建物跡と判断し調査を実施した。

規模と形態 平面形態は4.2×4.1mの隅丸方形を呈し、床面積は8.9㎡を測る。床面の標高は68.3m。検出面から床面まで最も残存する壁高は東壁で最大80cm、谷部斜面側の西壁は約40cmである。南東隅コーナーがやや途切れるものの、最大幅15cm、深さ約5cm、断面U字状の壁溝がめぐっている。床面上には被熱面・硬化面は確認されず、貼床も構築されていなかった。ピットは6ヶ所確認され、このうち四隅のコーナー付近に位置するP1～4が支柱穴である。P3からは径18～20cmほどの炭化物を密に含む柱痕が確認できた。柱穴間距離は、P1－P2間から以下、2.50m、2.56m、2.46m、2.50mであり、ほぼ均等である。床面ほぼ中央に位置するP6は、長軸90cm、短軸70cm、南西コーナーに張り出しをもった不整形円形を呈している。断面形態は、西側が段状を呈し、東側は底面が抉れている。南西コーナーは途切れているが、周囲には地山削り出しの周堤を有し、床面との比高差は約5cmを測る。埋土は上層から⑤層褐色土、⑥層暗褐色土、⑦層褐色土の3層に分かれ、このなかの⑥層は



第28図 S17出土遺物
表20 S17出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
53	S17 1層	弥生土器 甕	※16.0 △5.2	口縁部1/4	外面：口縁部9条の多条平行沈線、肩部板状工具による押引文 内面：口縁部ヨコナデ後一部ミガキ、胴部ヘラケズリ	密 1～2mmの白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	口縁部に煤付着
54	S17 2層	弥生土器 甕	※15.3 △7.5	口縁部1/3	外面：口縁部9条の多条平行沈線、頸部ヨコナデ、肩部平行沈線 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、ミガキ、胴部ヘラケズリ	密 3mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙～灰黄褐色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	良好	
55	S17 1層	弥生土器 甕	※17.6 △8.2	口縁部 1/4	外面：口縁部5条の多条平行沈線後ナデ、頸～胴部ナデ、肩部連続刺突文 内面：口縁部ヨコナデ、頸部工具ナデ、胴部ヘラケズリ	密 5mm以下の白色・灰色砂粒	外面：橙色～にぶい黄褐色 内面：橙色～灰褐色	良好	口縁部に炭化物付着
56	S17 1層	弥生土器 甕	※15.7 △3.9	口縁部1/6	外面：口縁部6条の多条平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	密 1mmほどの灰色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	
57	S17 1層	弥生土器 甕	※15.9 △3.7	口縁部1/4	外面：口縁部8～9条の多条平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	密 1mmの白色砂粒	外面：にぶい黄橙～灰黄褐色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	良好	口縁部に煤付着
58	S17 埋土	弥生土器 甕	※16.6 △5.2	口縁部 1/10以下	外面：口縁部14条の多条平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ミガキ、胴部ヘラケズリ	密 3mm以下の砂粒	外面：暗灰黄色 内面：暗灰黄色	良好	
59	S17 1層	弥生土器 甕	※17.0 △4.7	口縁部1/6	外面：口縁部16条の多条平行沈線後ヨコナデ、頸部ヨコナデ 内面：口縁部風化により調整不明、胴部ヘラケズリ	密 0.5～1mmの白色砂粒・石英	外面：にぶい黄色 内面：明黄褐色	良好	口縁部外面煤付着
60	S17 1層	弥生土器 甕	※16.0 △3.8	口縁部1/8	外面：口縁部14条の多条平行沈線後半ナデ消し 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密 1～2mmの白色砂粒・石英	外面：橙色 内面：橙色	良好	口縁部外面下半煤付着
61	S17 1層	弥生土器 甕	※14.0 △4.7	口縁部1/6	外面：口縁部12条の多条平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密 2mm以下の白色砂粒・石英	外面：にぶい黄色 内面：橙色	良好	
62	S17 1層	弥生土器 甕	－ △4.0	口縁部 1/10以下	外面：口縁部5条以上の多条平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ	密 1mm以下の白色砂粒・石英	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	
63	S17 埋土	弥生土器 底部	底径※6.6 △14.0	胴部～底部 1/8	外面：ヘラミガキ、胴部中位ヘラミガキ後ナデ 内面：ヘラケズリ	密 1～3mmの白色砂粒・石英	外面：橙色 内面：黒褐色～橙色	良好	
64	S17 1層	弥生土器 甕	－ △4.4	頸～肩部 1/4以下	外面：頸部ヨコナデ、肩部平行沈線・部分的にコビオサエ 内面：頸部ナデ、肩部ヘラケズリ	密 5mm以下の白色・灰色砂粒	外面：浅黄橙～灰黄褐色 内面：浅黄橙～灰黄褐色	良好	
65	S17 ピット埋土中	弥生土器 器台	階径※14.8 △2.8	脚部1/4	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ、裾端部ヨコナデ	密 3mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	

炭化物を多く含み、最下層の⑦層はとくに粘質に富んでいた。

埋土と遺物の出土状況 埋土の残存状況は良好であり、①層とした暗褐色土が弓なり状に覆い、その下部に②層褐色土、床面直上に③層暗褐色土が堆積する。②層は中央部がレンズ状に窪んでいることから自然堆積と考えられる。遺物の多くが①層から出土しているが、完存しているものは少ない。これらの遺物の多くは竪穴が廃絶され、少なくとも②層形成後に廃棄されたものであることから、竪穴廃絶から一定の期間を有していた点は注意する必要がある。③層は径2～5cmほどの炭化物と径1～2cmの焼土粒子を密に含み、層厚約5cmである。これは、床面東側の1.0×0.7mの範囲にわたって貼り付くように検出された炭化物集中部と一連のもので、とくに東側において良好に残存していた。④層は側壁に沿うように堆積しているが、本層も多くの炭化物がみられた。④・⑥層は住居に伴う何らかの構築材が土壌化して形成された可能性を指摘しておきたい。

出土遺物 53は口縁端部がやや開き、口縁帯には9条の多条平行沈線が、体部上半には板状工具による押引文が施文されている。54は同じく9条の多条平行沈線文が口縁帯をめぐり、体部上半に平行沈線が引かれている。55は口縁帯に5条の平行沈線文、体部上半に楕円形の連続刺突文が描出される。口縁部には煮沸時の吹き出しによる炭化物が付着している。56～62は複合口縁甕の口縁部から頸部にかけての破片で、いずれも6～16条の多条平行沈線がみられる。63は甕体部下半から底部破片である。64は54に類似し、肩部に平行沈線が描かれている。65は器台の脚裾であり、外面はナデ調整、内面はヘラケズリとヨコナデ調整である。

時期 本遺構からは床面出土遺物はみられなかったが、埋土中出土土器の多くが清水編年V-3様式に比定されることから弥生時代後期後葉に廃絶されたものと推定される。 (小口)

S I 8 (第29～32図、表21～24、PL. 8・34・41・46・49)

位置 M6グリッド、標高69.4mの緩斜面に位置し、S I 6に近接する。

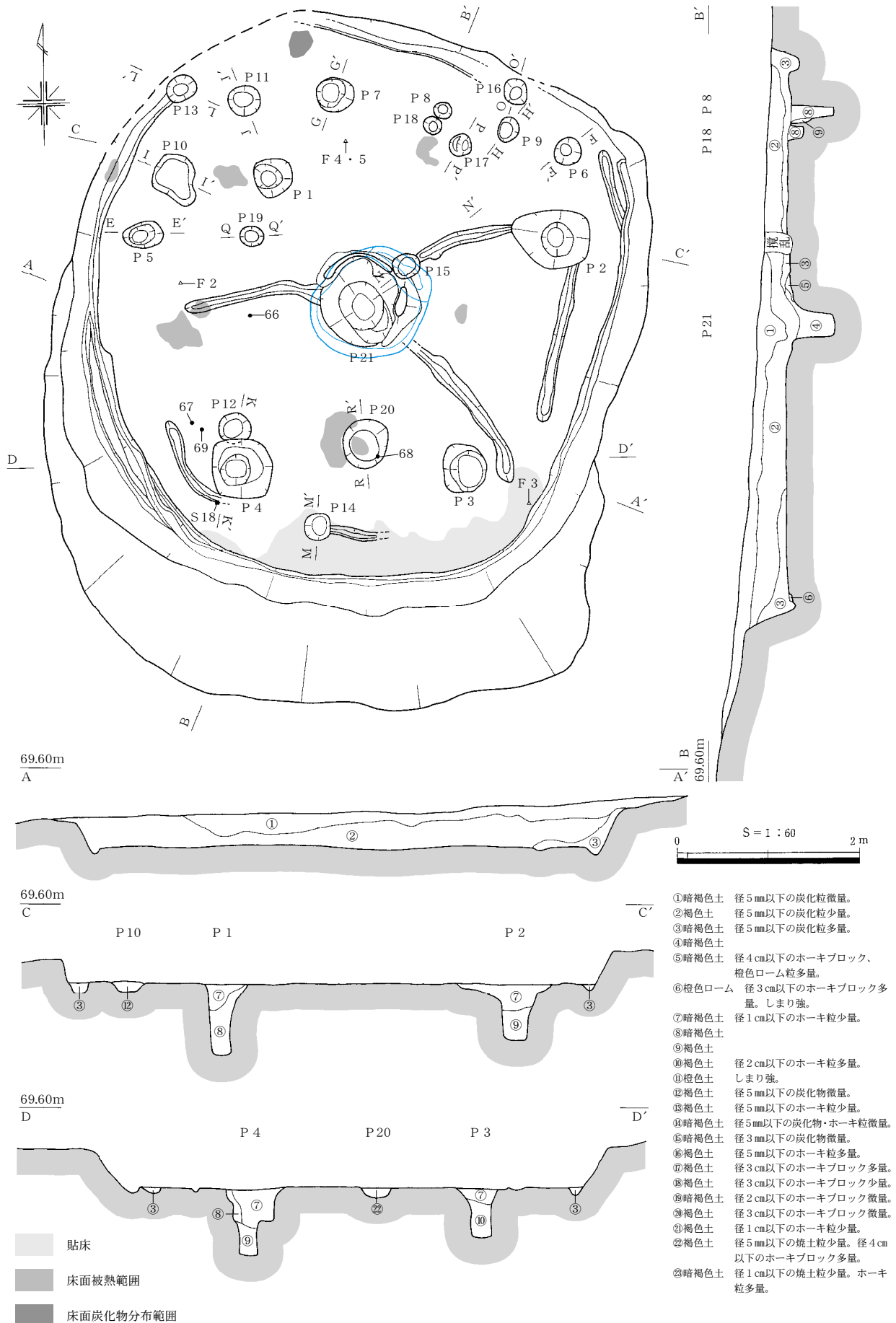
調査の経過 V層精査中に7×7mの範囲にわたり、暗褐色土の不整楕円形プランを検出した。プラン規模より竪穴住居の可能性が高いと判断し、プランを8分割するベルトを設定し、調査を行った。

規模と形態 南側および壁面上部が崩落していたため検出プラン不整楕円形であったが、本来の規模・形態は長軸6.4m、短軸6.2mの隅丸方形である。検出面からの深さは最大55cmを測る。

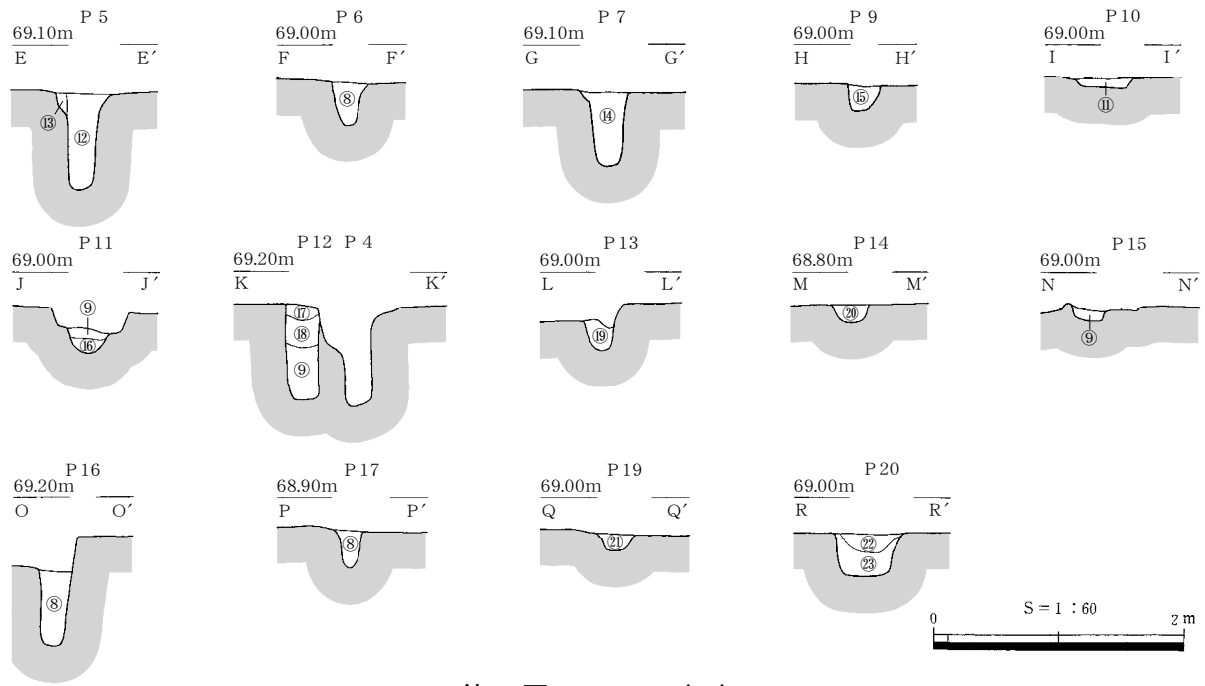
床面において壁溝、支柱穴、中央ピット、被熱面（8箇所）を検出した。土層断面において認識できなかったが、床面において壁溝が4条確認できることから、2～3度の建替えが行われたと考えられる。従って、新しいものから8 a、8 b、8 c、8 dとし順に述べる。8 aは壁溝が北側壁面で一部消失するが本来は全周したと想定される。床面は南側で⑥層を用いて貼床が付されるが、その他は掘り込んだ面を直接床とする。支柱穴は、P 2～5・7で柱穴間距離は2.6m～2.9mを測る。中央ピット（P 21）は周堤を伴い、ピットを掘り込んだ後、⑤層を貼付け構築される。8 b、8 cは壁溝が南西壁に位置し、8 aの壁溝に切られる。8 b、8 cの新旧関係は

表21 S I 8ピット計測表

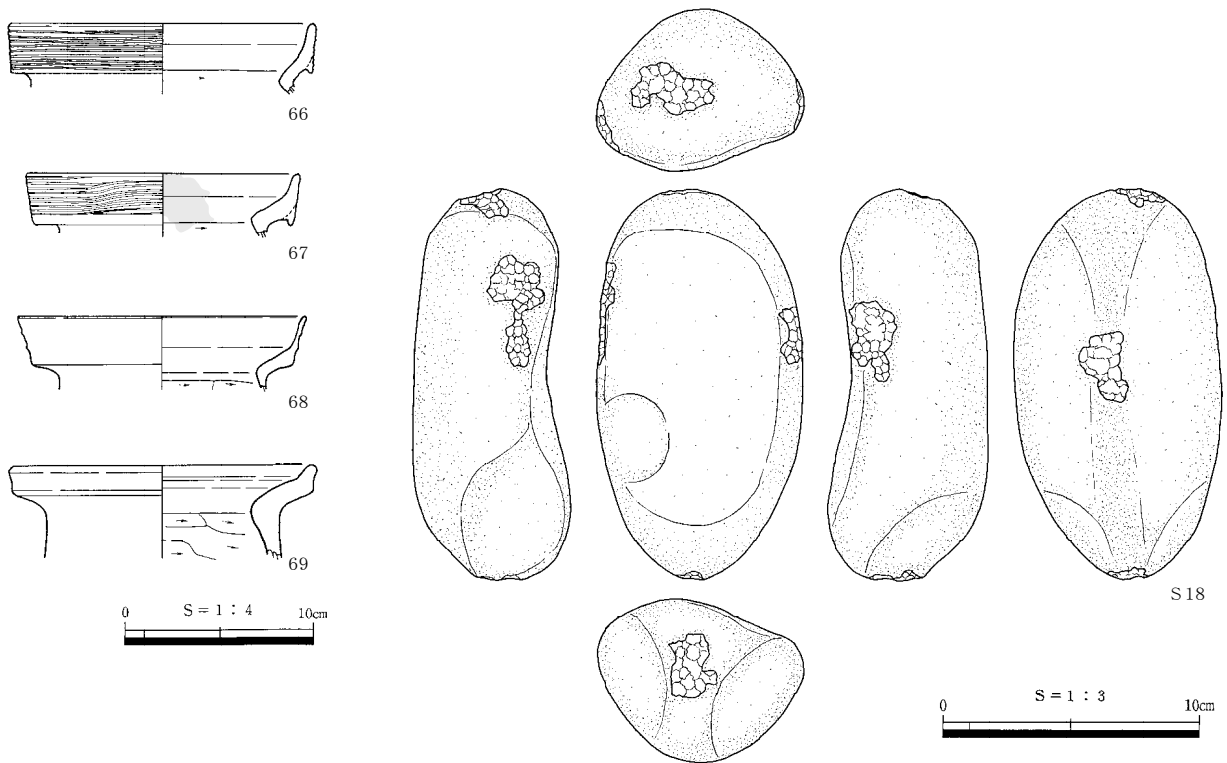
P番号	長軸×短軸-深さ(m)	備考
P 1	0.46×0.45-0.79	主 柱
P 2	0.9×0.64-0.62	主 柱
P 3	0.54×0.52-0.54	主 柱
P 4	0.67×0.65-0.76	主 柱
P 5	0.45×0.3-0.75	主 柱
P 6	0.33×0.29-0.4	
P 7	0.43×0.38-0.57	主 柱
P 8	0.2×0.18-0.48	
P 9	0.3×0.22-0.22	
P 10	0.6×0.5-0.09	
P 11	0.35×0.35-0.23	
P 12	0.35×0.35-0.72	主 柱
P 13	0.34×0.26-0.23	
P 14	0.3×0.28-0.13	
P 15	0.3×0.27-0.06	支柱?
P 16	0.27×0.25-0.62	
P 17	0.25×0.24-0.3	
P 18	0.2×0.2-0.16	
P 19	0.26×0.23-0.22	
P 20	0.57×0.5-0.34	主 柱
P 21	0.95×0.9-0.52	中央ピット



第29図 S18 (1)



第30図 S18(2)



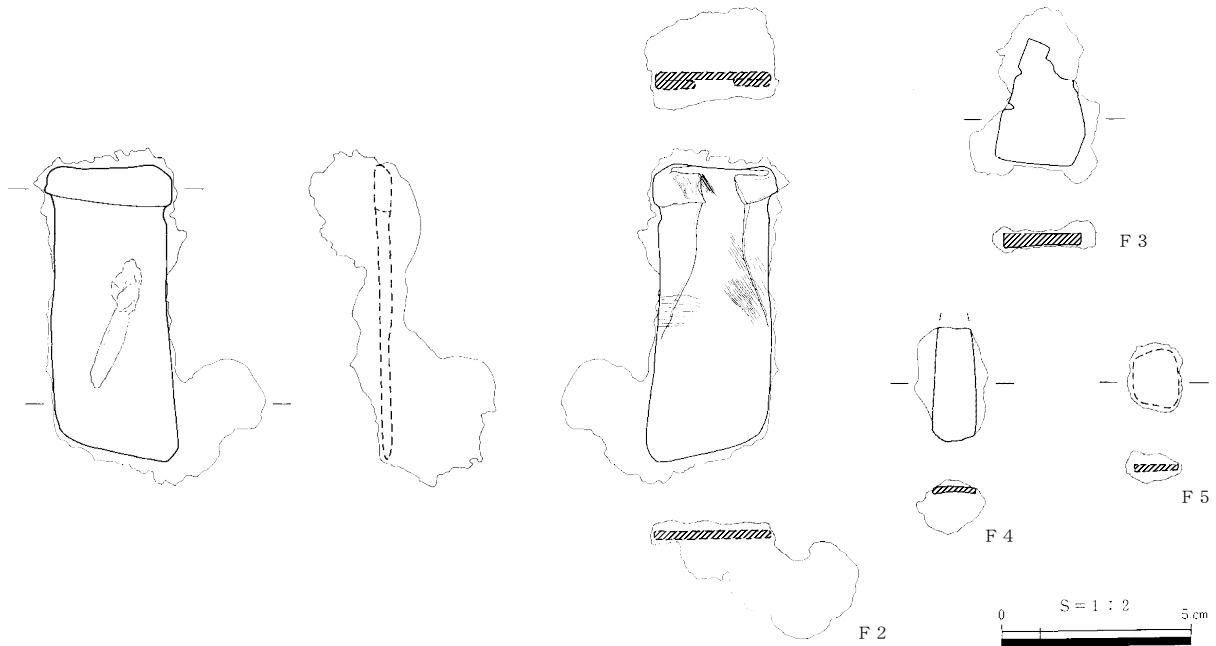
第31図 S18出土遺物(1)

表22 S18出土土器観察表

遺物No.	遺層 構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
66	S18 2層	弥生土器 甕	※16.0 △3.3	口縁部1/7	外面：口縁部10条の多条平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁～頸部上半ヨコナデ、頸部下半以下ヘラケズリ	密 1mmほどの砂粒	外面：にぶい黄橙～灰黄褐色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	良好	口縁部に煤付着
67	S18 2層	弥生土器 甕	※14.2 △3.2	口縁部1/5	外面：口縁部9～10条の多条平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁～頸部上半ヨコナデ、頸部下半以下ヘラケズリ	密 5mm以下の白色・灰色砂粒	外面：にぶい黄橙色～灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色～灰黄褐色	良好	口縁部内面に赤色塗彩痕
68	S18 2層	弥生土器 甕	※15.0 △3.9	口縁部1/6	外面：口縁～頸部風化により調整不明 内面：口縁～頸部上半ヨコナデ、頸部下半以下ヘラケズリ	密 2mm以下の白色砂粒	外面：にぶい橙～黄褐色 内面：にぶい黄橙～にぶい黄褐色	不良	頸部に炭化物付着
69	S18 2層	弥生土器 壺	※15.8 △4.9	口縁～頸部 1/8	外面：ヨコナデ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	密 5mm以下の白色・灰色砂粒	外面：灰黄褐色 内面：灰色	良好	

表23 S18出土石器観察表

遺物No.	出土位置	層位	器種	石材	法量				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
S18	S18	3層	敲石	黒雲母角閃石安山岩	15.4	6.3	8.2	970.0	裏・側・上下面敲打痕



第32図 S18出土遺物(2)

表24 S18出土鉄器観察表

遺物No.	遺層・構位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	形態的特徴	備考
F 2	S18 床直	袋状鉄斧	7.8	3.2	※0.4	74.5	袋端部を折り返すもので、袋部を潰し板状鉄斧として使用	外面に繫縛痕(樹皮?)
F 3	S18 1層	鉄器片	△3.2	2.2	0.4	13.2	両側縁付近に最大厚をもち、横断面は凹レンズ状を呈す	
F 4	S18 床直	鈍	△3.0	1.2	0.2	7.0	身幅が狭い鈍で、わずかな裏すきをもつ	
F 5	S18 床直	鉄器片	※1.8	※1.2	※0.15	2.3	不整形の鉄器片	F4と同一個体で基部か?

不明である。また、対角線上に位置し、8 aの壁溝に切られる溝も埋土が類似することからいずれかの溝である。支柱穴はピット配列より8 aと共有する可能性がある。8 dは壁溝が東～南西部壁面の約50cm内側をめぐる。支柱穴は埋土が壁溝と類似するP 1・12で本来は4本柱だったと考えられる。

埋土と遺物の出土状況 3層に分層され、褐色土が主体をなす。堆積状況は自然堆積の様相を示す。土器・石器・鉄器・炭化種子が出土しており、9点を図示した。

出土遺物 65～68は甕で、清水編年V-3～VI-1様式に比定される。F 2・4・5は床面直上において出土し、F 2は袋状鉄斧で、袋部の端部を折り返し製作している。また、図示していないが炭化種子は埋土およびP 2より出土しており、肉眼観察では桃核と思われる。

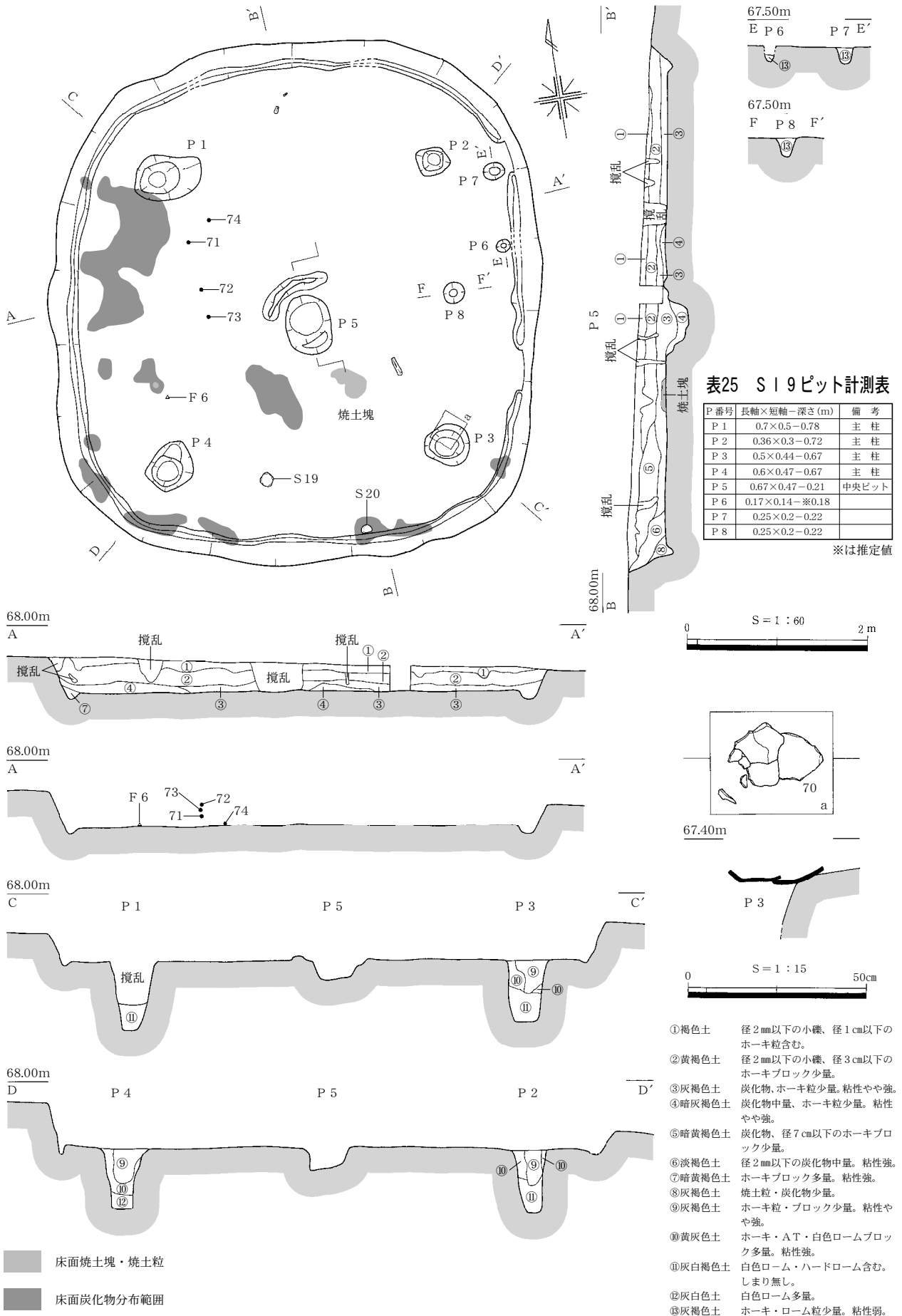
時期 出土遺物より、弥生時代後期後葉～弥生時代終末期と考えられる。(福井)

S19 (第33・34図、表25～28、PL.9・33・34・41・46・49)

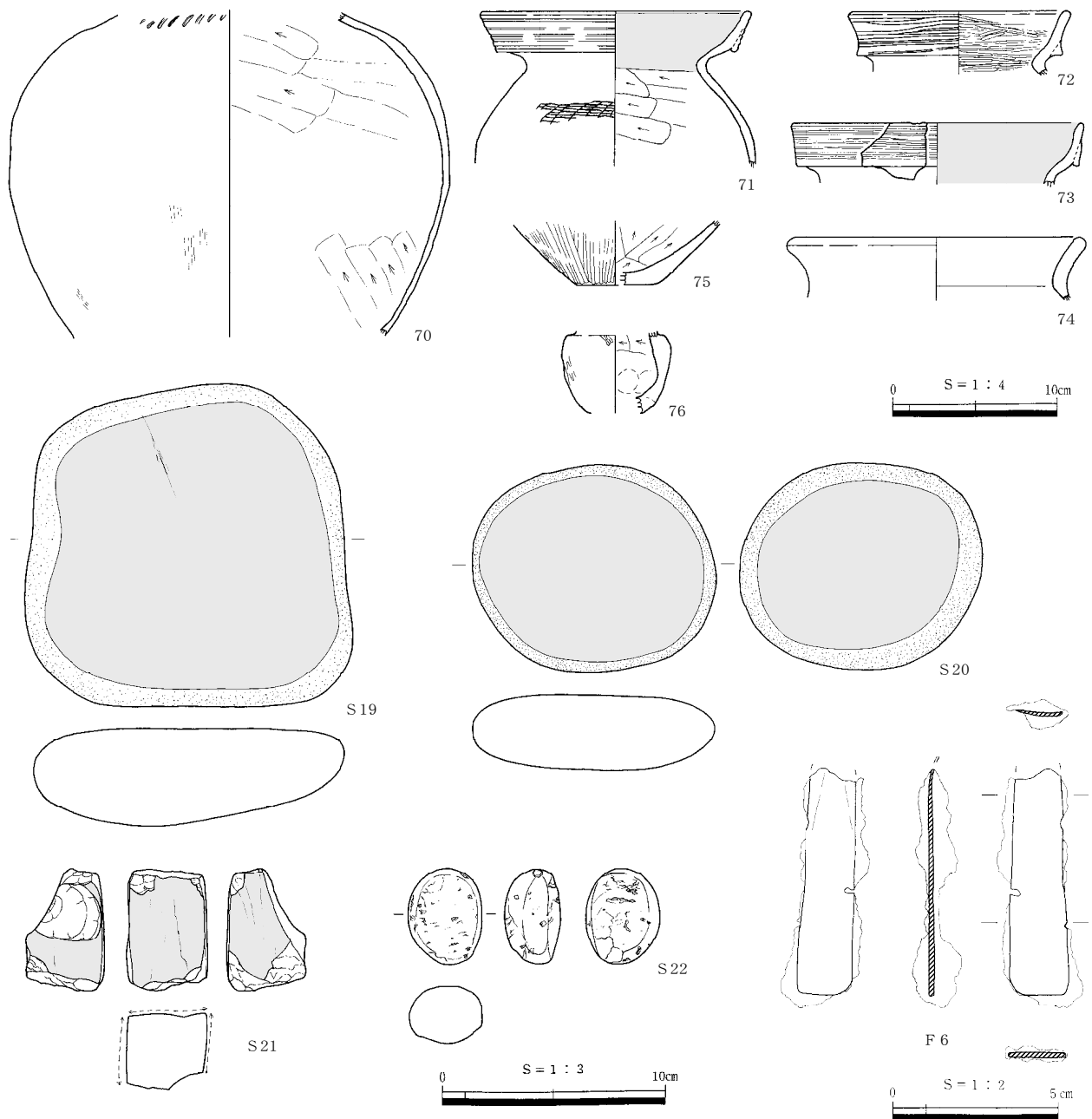
位置 H 8～9グリッド、標高67.7m～67.4mの南から北へ緩やかに下る斜面に位置する。

調査の経過 重機による表土剥ぎ後、第VI層褐色土の精査中に、5×5mほどの範囲に渡って、地山土よりやや暗いプランを検出した。サブトレンチを東西・南北に設定し掘り下げを行った結果、側壁と壁溝を確認したため、竪穴建物跡と判断し調査を実施した。

規模と形態 平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長軸5.8m、短軸5.5m、床面積は22.3㎡を測る。床面では、炭化材小片や焼土粒、多量の炭化物を主体とする炭層が固着したような箇所が見られた。中央部やや南側では、長さ40cm、厚さ10cmほどの焼土塊も認められた。この焼土塊の下面では、被熱硬化し赤化した状況は見受けられなかった。



第33図 S19



第34図 S19出土遺物

床面で検出したピットは計8基で、そのうちP1～P4の4基が支柱穴と考えられる。柱穴間距離はP1-P2から順に3.1m、3.2m、3.1m、3.25mである。P5は中央ピットと考えられる。北側に地山削り出しの周堤を有する。断面台形状で幅15cm、高さ5cmほどである。P6～P8は、支柱穴と比べると径が狭く浅い。P6とP7は当初配置と形態から入り口施設を想定していたが、ピット周辺の壁面や床面が他と異なる点がないため断定には及ばない。棚などの屋内施設の一部とも考えられる。壁面には、断面U字状で幅10～20cm、深さ10cm以下の壁溝がめぐり、東壁で途切れている。

埋土と遺物の出土状況 埋土はピット内も含めて13層に分層できた。上述した床面の状況から、当遺構は廃棄時に焼失したものと考えていたが、床面までの埋土は自然堆積と判断されるもので、支柱穴内埋土も炭化物や焼土などの流入がまったく認められなかった。埋土上層の⑨層は、地山土をブロック状に含むしまりのある土で、柱痕跡ではなく柱抜き取り後の埋め戻した土と判断される。このような状況から、当建物は廃棄時焼失されたのではなくそのまま解体し、支柱穴のみ埋め戻して放棄

表26 S I 9 出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
70	S I 9 床直	弥生土器 甕	— △19.8	胴部1/2 以下	外面：肩部連続刺突文、胴部タテハケ後ナデ 内面：ヘラケズリ	密 3mm以下の石英・白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	摩滅顕著、煤付着
71	S I 9 2層	弥生土器 甕	※16.2 △9.3	1/4	外面：口縁部5条の多条平行沈線後ナデ消し、頸～胴部ナデ・ 板状工具による押し文 内面：口縁～頸部ミガキ、胴部ヘラケズリ後ナデ	密 1mmほどの白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	外面煤付着、口縁～胴部上半内面赤色塗彩
72	S I 9 2層	弥生土器 甕	※13.0 △3.6	1/8	外面：口縁部5～6条の多条平行沈線後ナデ消し、頸部ヨコナデ 内面：口縁～頸部ヘラミガキ	密 1mmほどの白色砂粒	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	良好	内外面煤付着
73	S I 9 2層	弥生土器 甕	※18.0 △3.7	口縁部1/4	外面：口縁部7条の多条平行沈線後ナデ消し、頸部ヨコナデ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ	密 1mmの白色砂粒	外面：灰褐色 内面：明褐色	良好	内面部分的に赤色塗彩痕
74	S I 9 床直	弥生土器 甕	※17.3 △3.8	口縁部1/4	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ	密 3mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	外面炭化物付着
75	S I 9 埋土	弥生土器 底部	底径※4.8 △3.7	底部1/4	外面：ヘラミガキ、底面ナデ 内面：ヘラケズリ	密 2mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	
76	S I 9 埋土	弥生土器 ミチユリ土器	— △5.0	1/3	外面：ナデ後一部ミガキ 内面：胴部上半ケズリ・下半ユビオサエ	密 2mm以下の石英	外面：黒色 内面：黒色	良好	

表27 S I 9 出土石器観察表

遺物No.	出土位置	層位	器種	石材	法量				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
S19	S I 9	床直	台石	安山岩	14.7	4.6	14.9	1590.0	表面磨面
S20	S I 9	床直	磨石	安山岩	9.5	3.4	11.1	540.0	表裏面磨面
S21	S I 9	床直	砥石	流紋岩質凝灰岩	5.6	3.5	3.7	94.5	砥面3面・線状痕有
S22	S I 9	埋土	軽石製品	軽石	4.4	2.6	3.3	7.2	側面に平坦面の造り出し

表28 S I 9 出土鉄器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	形態的特徴	備考
F 6	S I 9 床直	鉈	△6.9	1.75	0.15	12.5	平板状の身部の先端に、わずかに裏すきを有す作業部をもつ	

されたと考えられる。床上の炭層や焼土塊は、その後そこで何らかの廃材を燃やすなどの廃棄行為によるものと推測される。

出土遺物 遺物は、床面から甕70・74、台石S19、磨石S20、鉈F6などが出土した。②層から71～73、南側壁溝内から砥石S21、その他埋土から75・76などが出土した。70は床面からの出土であり、埋め戻されたP3上でもあることから、この土器は建物廃絶後投棄されたものと考えられる。

時期 出土した遺物は清水編年V-3様式に比定されることから、弥生時代後期後葉に廃絶された竪穴住居跡と考えられる。(岩井)

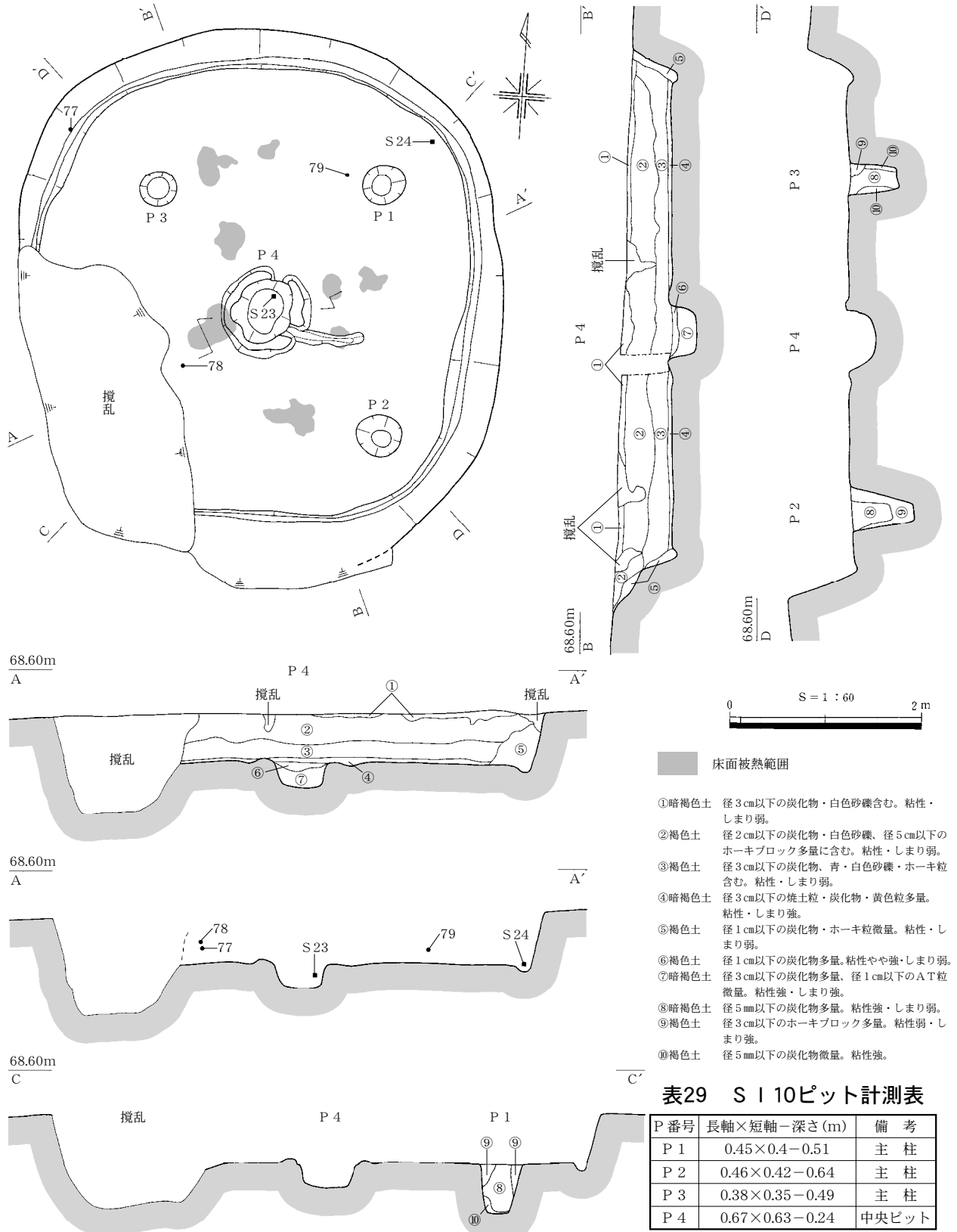
S I 10 (第35・36図、表29～31、PL.10・34・41)

位置 J9・10グリッド、東山北寄りの谷部に面した標高約68mの緩斜面に位置する。

調査の経過 VI層褐色土の精査中に炭化物混じりのやや濁った褐色土のプランを検出した。当初、埋土上層である②層の色調が地山であるV層ソフトロームと近似し、とくに西側ではホーキブロックが多く含まれていたことから風倒木痕の可能性が想定された。念のため東西方向にサブトレンチを設定し掘り下げを行ったところ、西壁～南西壁が風倒木による攪乱を受けていたが、中央ピット、側壁・壁溝が確認されたため、竪穴住居跡と判断し調査を実施した。

規模と形態 平面形態は5.5×5.1mの隅丸方形を呈し、床面積は推定14.9㎡を測る。床面の標高は67.6m。検出面から床面まで最も残存する壁高は北壁で最大60.8cm、最も低い南壁で約47cmである。壁際には幅15～20cm、深さ約7cm、断面U字状の溝がめぐっている。床面上には8ヶ所の被熱面が認められ、P4西側に位置する被熱面と東側に派生する溝を跨いだ被熱面は硬化していた。ピットは4ヶ所あり、このうちP1～3が主柱穴であるが、住居形態や柱間距離を考慮すると南西隅にもピットが存在していたものと想定される。したがって主柱穴は4基と考えられよう。P1～3埋土いずれにも、柱痕と考えられる炭化物を密に含む⑧層が幅20～25cmで確認された。柱穴間距離は、P1-P2が2.63m、P3-P1が2.38mであり、南北方向にやや長い。床面ほぼ中央に位置するP4は、

長軸67cm、短軸63cmの不整円形を呈し、南東コーナーから溝が派生している。この溝は長さ80cm、幅10~13cm、深さ3cmほどで壁溝には続かない。P4の断面形態は桶状であり、周囲には地山削り出しの周堤がめぐっている。床面との比高差は約3cmを測る。P4埋土は上層から⑥層褐色土、⑦層暗褐色土の2層に分かれ、⑦層は炭化物を密に含み粘質に富んでいた。



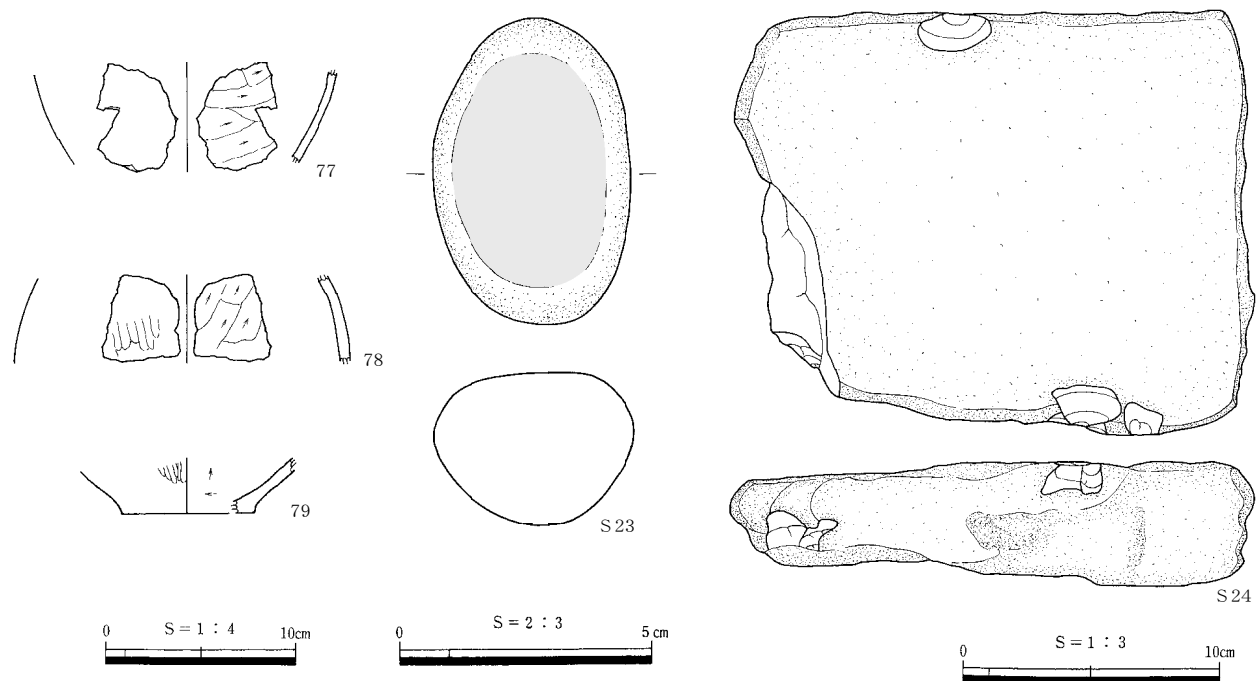
第35図 S I 10

埋土と遺物の出土状況 埋土の残存状況は良好であり、①層とした暗褐色土、さらにホーキブロックを多く含む褐色土②・③層がほぼ水平に堆積していることから、住居廃絶後、人為的に埋め戻された可能性が想定される。床面直上には径2～3cm大の炭化物や焼土粒子を密に含む暗褐色土④層が、厚さ3～4cmで均質に堆積しているが、これはS I 7の状況に近い。

遺物は、非常に少なくS 23・24の石器以外は、③層上面からの出土である。いずれも小片であり、人為的な埋め戻しの際に混入したものであろう。S 23はP 4埋土中から、S 24は北東コーナーの床面直上から出土している。

出土遺物 77は甕の体部下半、78は体部上半の破片であり、いずれも外面に煤が付着している。S 23は安山岩製の磨石であり、機能面は摩耗している。S 24は方形を呈する板状の安山岩製台石である。縁辺部に部分的な剥離が認められる。

時期 本遺構からの出土遺物は少ないが、埋土中出土土器の特徴や隅丸方形の平面形態などから、弥生時代後期後葉に廃絶されたものと推定される。 (小口)



第36図 S I 10出土遺物

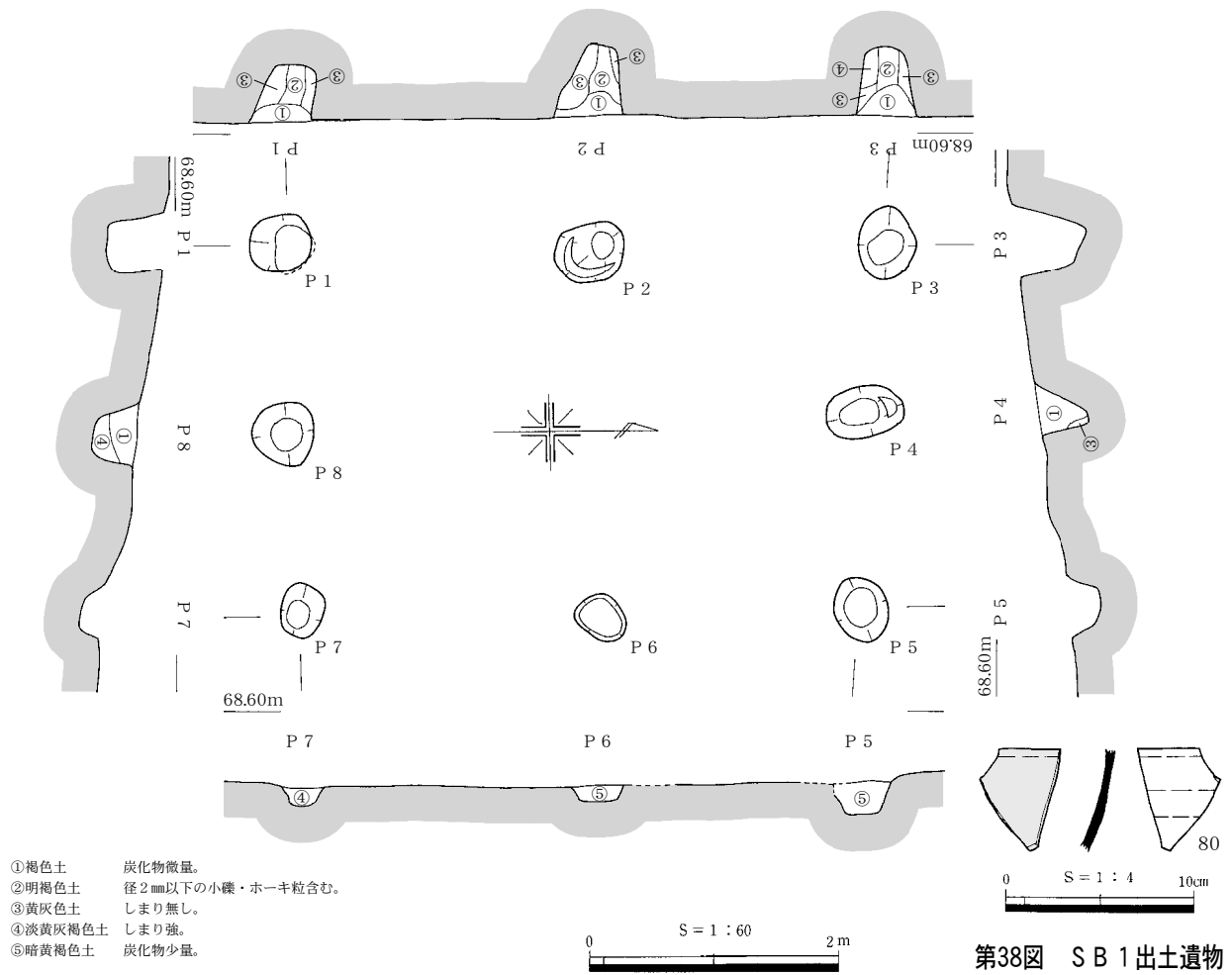
表30 S I 10出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
77	S I 10 3層	弥生土器 甕	— △5.5	1/8以下	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	密 1mmほどの白色砂粒	外面：橙～灰褐色 内面：灰色	良好	外面煤付着
78	S I 10 3層	弥生土器 甕	— △4.4	1/8以下	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	密 1mmほどの白色砂粒	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：褐灰色	良好	外面煤付着
79	S I 10 3層	弥生土器 底部	底径※7.0 △2.9	底部1/4 以下	外面：ナデ後ヘラミガキ、底面ナデ 内面：ヘラケズリ	密 2mmほどの白色・灰色砂粒	外面：橙～褐灰色 内面：にぶい橙色～灰色	良好	

表31 S I 10出土石器観察表

遺物No.	出土位置	層位	器種	石材	法量				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
S 23	S I 10	P 5-2層	磨石	安山岩	6.1	3.0	3.9	99.5	表面磨面
S 24	S I 10	床直	台石	安山岩	20.2	4.9	16.8	2380.0	

第2節 掘立柱建物跡



第37図 SB1

第38図 SB1出土遺物

SB1 (第37・38図、表32・33、PL.11・35)

位置 P14グリッド、標高67.8～68.4mの丘陵平坦面からやや東側に下った斜面地に位置する。主軸は南北方向を向いている。南西側では、主軸の異なるSB2と切り合っている。

調査の経過 V層暗褐色土を精査中、南北軸に等間隔で並ぶP1～P3を検出した。その後東側斜面下に並走するP8・P4・P7～P5を検出したことから、掘立柱建物跡と判断し調査を実施した。

規模と形態 桁行2間(4.6m)、梁行2間(3.0m)の掘立柱建物跡で、N-1°-Eに主軸をとる。柱間距離はP1-P2から順に、2.5m、2.3m、1.4m、1.6m、2.1m、2.4m、1.5m、1.6mを測る。柱掘り方は平面楕円形から隅丸方形で、底面レベルは標高67.8m～67.9m内である。

埋土と遺物の出土状況 埋土は褐色系を主体とする。西側柱穴列P1～P3の残りがよく、柱痕跡が確認された。断面観察から、柱径は20cm前後に復元される。遺物はP1内底面付近から内面に赤色顔料が付着した須恵器片80が出土した。

表32 SB1ピット計測表

P番号	長軸×短軸-深さ(m)
P1	0.5×0.45-0.46
P2	0.56×0.43-0.55
P3	0.58×0.48-0.57
P4	0.65×0.43-0.3
P5	0.5×0.45-0.27
P6	0.4×0.33-0.16
P7	0.45×0.35-0.2
P8	0.53×0.5-0.37

表33 SB1出土土器観察表

遺物No.	遺構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
80	SB1-P1 底面直上	須恵器 坏?	- △5.5	1/10以下	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 0.5mm以下の白色砂粒・ マンガン	外面：灰色 内面：灰色	良好	内面赤色顔料付着

時期 出土した遺物80は小片で、時期比定は困難であった。またSB2との先後関係であるが、明確な柱穴の切り合いがなく判断できなかった。ただし当遺構は、東側斜面下に位置するSB3・4と主軸方向が一致しており、何らかの関係を持っていた可能性が考えられる。(岩井)

SB2 (第39図、表34、PL.11)

位置 P14グリッド、標高68.2~68.4mの丘陵平坦面からやや東側に下った斜面地に位置する。主軸は西北-南東方向を向いている。北側では、主軸の異なるSB1と切り合っている。

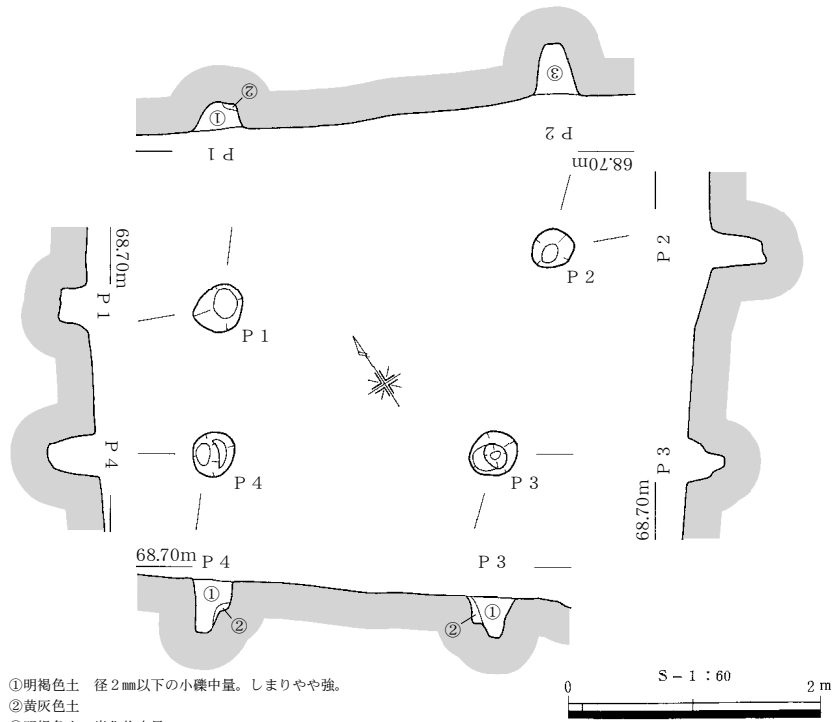
調査の経過 V層を精査中、柱痕跡があり土器を含むP3を検出した。その後周囲でP1・P4・P2を検出した。SB1と主軸が異なる上、平面形もいびつであるが、底面レベルと規模から掘立柱建物跡と判断し調査を実施した。

規模と形態 桁行1間(2.48m)、梁行1間(1.45m)の掘

立柱建物跡で、N-55°-Wに主軸をとる。柱間距離はP1-P2から順に、2.7m、1.7m、2.3m、1.2mを測る。柱掘り方は平面楕円形が主体で、底面レベルは標高68.3m~67.8mである。P3とP4の掘り方底面は、二段に掘りこまれている状況から柱痕跡であった可能性が考えられる。底径から復元される柱径は約15cmである。

埋土と遺物の出土状況 埋土は褐色系を主体とする。遺物は出土していない。

時期 当遺構とSB1との先後関係は上述のとおり不明である。当遺跡内において主軸を同じくする掘立柱建物跡は他になく、時期は不明である。(岩井)



第39図 SB2

表34 SB2ピット計測表

P番号	長軸×短軸-深さ(m)
P1	0.42×0.4-0.24
P2	0.33×0.31-0.41
P3	0.5×0.38-0.34
P4	0.35×0.35-0.43

SB3 (第40・41図、表35・36、PL.12・35)

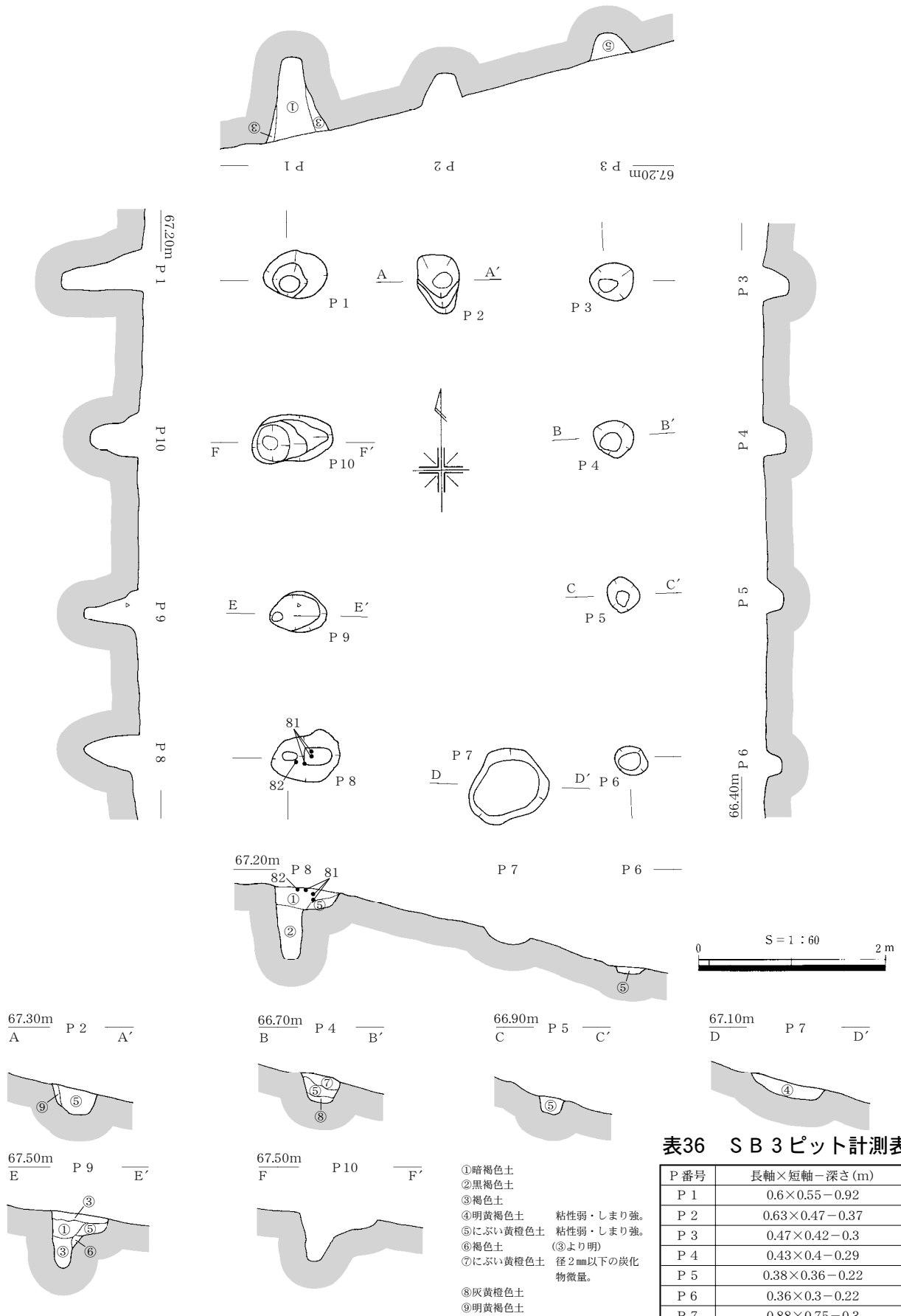
位置 O13~P13グリッド、標高67.1m、谷部緩斜面に位置し、主軸を同じくするSB4に隣接する。P1がSS2と重複するが、新旧関係は不明である。



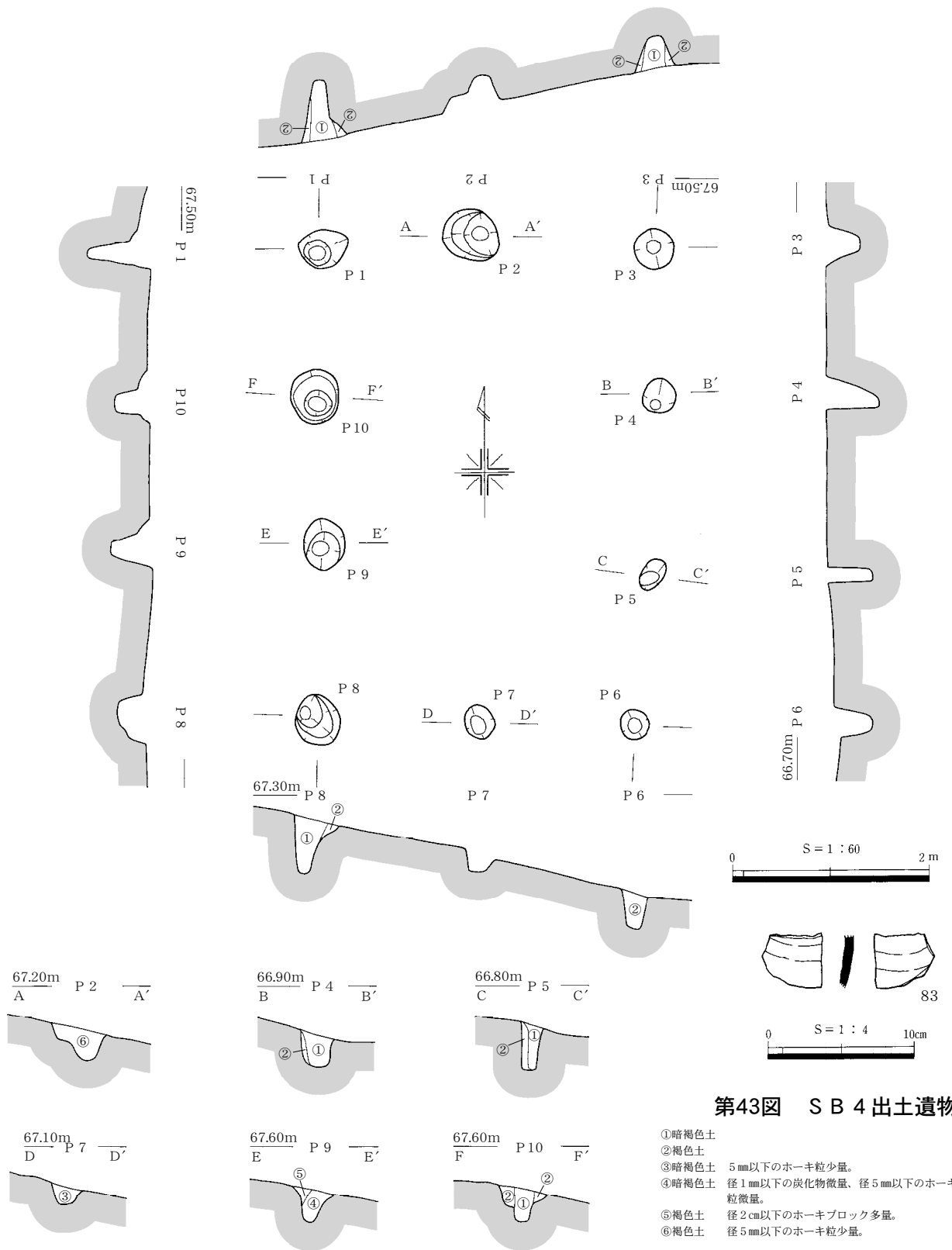
第40図 SB3出土遺物

表35 SB3出土土器観察表

遺物No.	遺構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
81	SB3-P8 1層	土師器 坏	※12.0 △3.4 以下	口縁部1/4 以下	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 2mm以下の石英・白色砂 粒・雲母	外面：灰白色 内面：灰白色	良好	内外面赤色塗彩
82	SB3-P8 1層	須恵器 甕?	△4.3	胴部1/10 以下	外面：平行タタキ後カキ目 内面：同心円状当具痕	密 2mm以下の白色砂粒	外面：黒色 内面：灰色	良好	



第41図 SB3



第42図 SB4

表37 SB4出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
83	SB4-P1 埋土	須恵器 壺	— △0.9	胴部1/4 以下	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 マンガン多量	外面：灰色 内面：灰オリーブ色	良好	

調査の経過 V層下位精査中に検出した。

規模と形態 本来の掘り込み面は検出面より上位と考えられる。規模は桁行3間(5.17m)、梁行2間(3.7m)で、主軸はN-1°-Eをとる。柱掘り方平面形は楕円形および円形で、深さは20~90cmを測る。柱間距離は1.35m~2.4mとばらつきがある。

遺物 P8・9より土器片数点、椀形鍛冶滓1点が出土しており、土器2点を図示した。81は内外面赤色塗彩された土師器坏で伯耆国庁編年第2段階に比定され、82は須恵器甕である。

時期 出土遺物より平安時代前期、9世紀代と考えられる。本遺構の明確な性格は不明と言わざるを得ないが、周辺に同時期の掘立柱建物、鍛冶関連遺構が存在することから、それらとの関連性が想定される。(福井)

表38 S B 4ピット計測表

P番号	長軸×短軸-深さ(m)
P 1	0.48×0.4-0.45
P 2	0.57×0.52-0.41
P 3	0.42×0.41-0.36
P 4	0.35×0.34-0.56
P 5	0.35×0.24-0.49
P 6	0.31×0.3-0.38
P 7	0.35×0.3-0.21
P 8	0.52×0.46-0.27
P 9	0.54×0.43-0.47
P 10	0.55×0.48-0.46

S B 4 (第42・43図、表37・38、PL.12・35)

位置 P・Q13グリッド、標高66.4mの谷部緩斜面に位置し、主軸を同じくするS B 3に隣接する。

調査の経過 V層下位精査中に検出した。

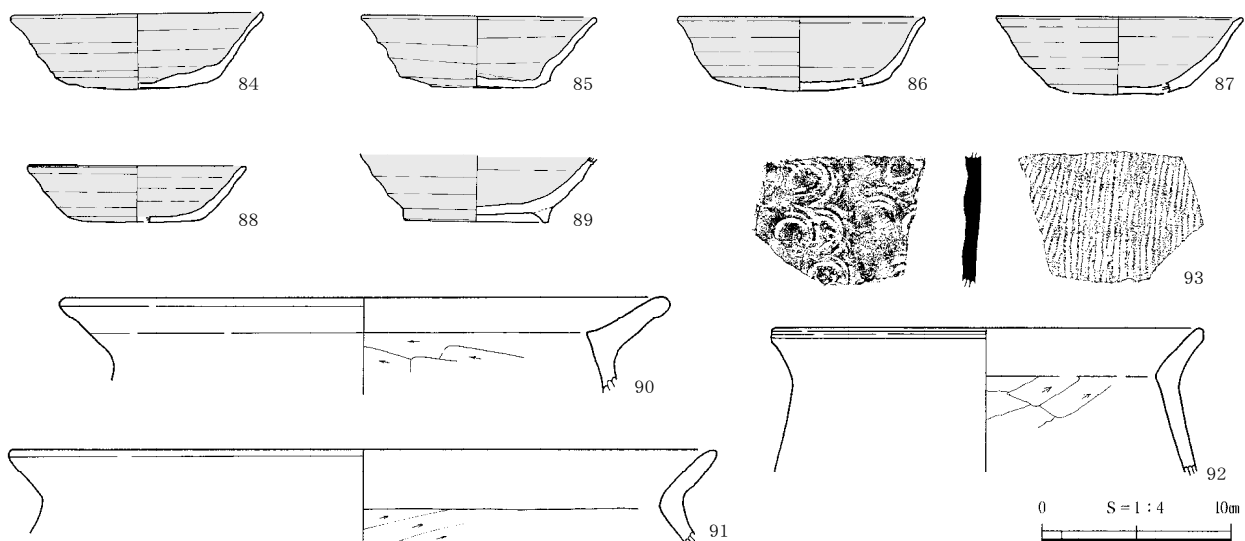
規模と形態 本来の掘り込み面は検出面より上位と考えられる。規模は桁行3間(4.8~4.9m)、梁行2間(3.4m)で主軸はN-1°-Eをとる。掘り方平面形は楕円形および円形で、柱間距離は1.35~1.9mを測りばらつきがある。埋土は褐色土が主体をなす。

出土遺物 P1・8・9より土器片が5点出土しており、1点83を図示した。

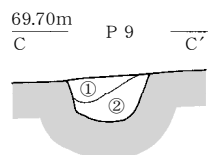
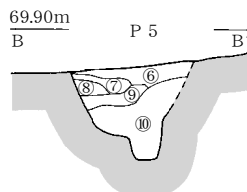
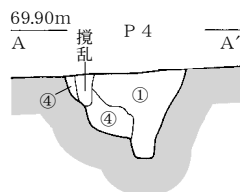
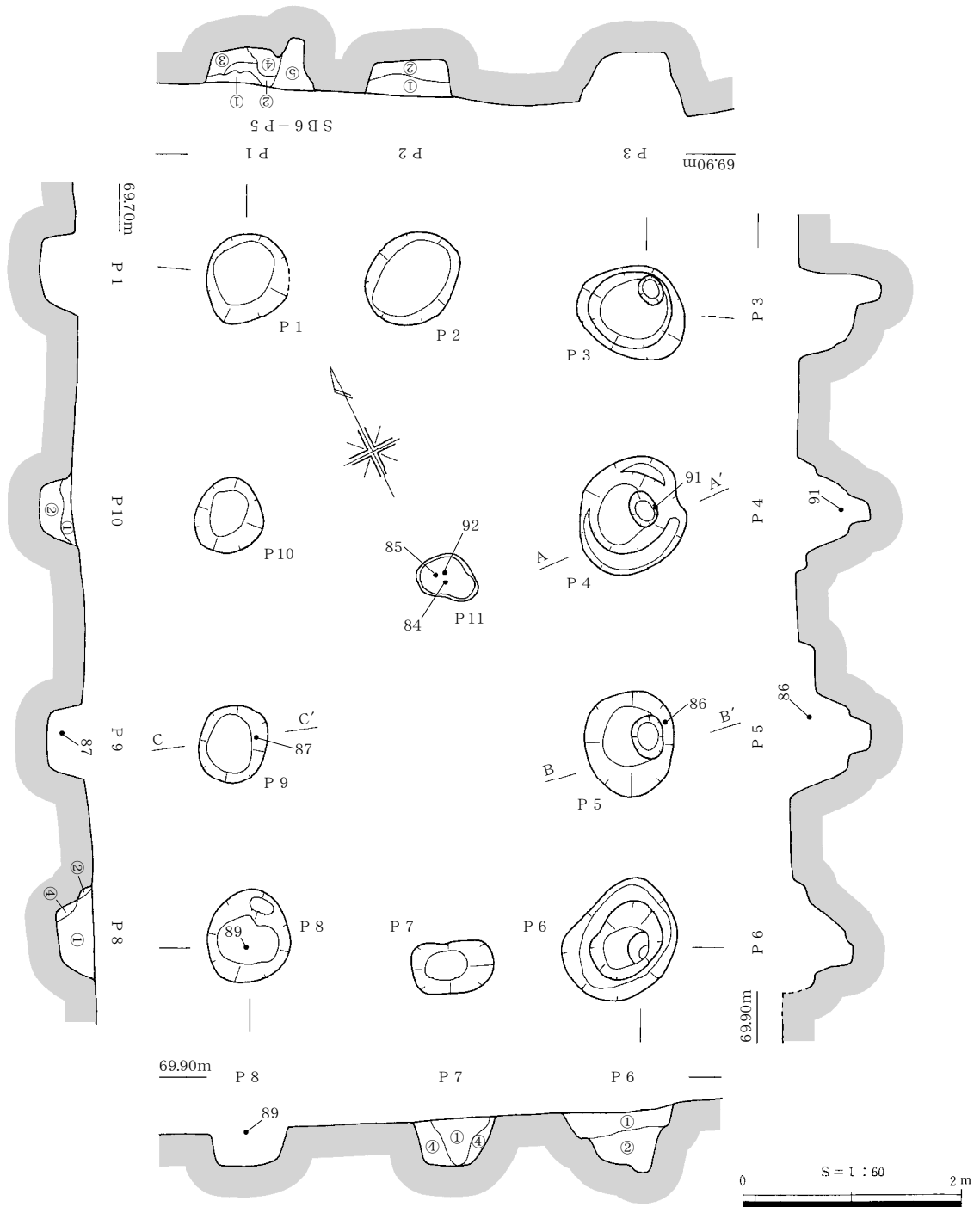
時期 出土遺物、周辺の遺構検出状況より平安時代前期、9世紀代と考えられる。本遺構の明確な性格は不明と言わざるを得ないが、周辺に同時期の掘立柱建物、鍛冶関連遺構が存在することから、それらとの関連性が想定される。(福井)

表39 S B 5ピット計測表

P番号	長軸×短軸-深さ(m)
P 1	0.85×0.75-0.37
P 2	0.93×0.75-0.34
P 3	1.0×0.83-0.67
P 4	1.08×0.97-0.66
P 5	0.96×0.83-0.77
P 6	1.15×0.88-0.55
P 7	0.78×0.48-0.47
P 8	0.85×0.75-0.35
P 9	0.73×0.6-0.29
P 10	0.67×0.6-0.33
P 11	0.58×0.4-0.60

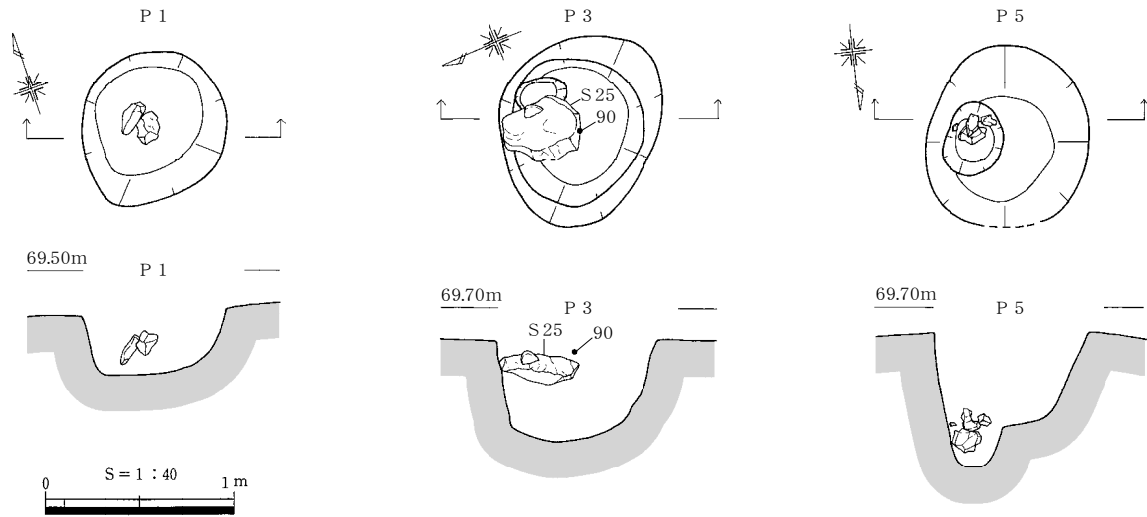


第44図 S B 5出土遺物(1)

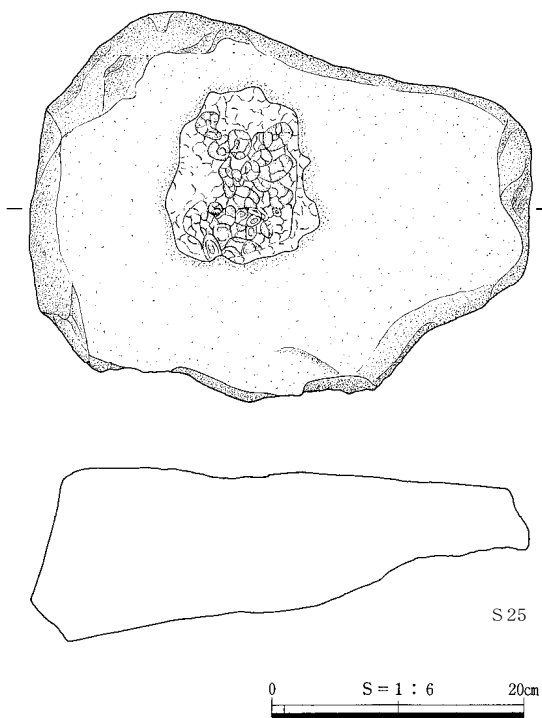


- ①暗褐色土 径5mm以下の焼土粒・炭化物・白色砂礫多量。粘性・しまり弱。
- ②暗褐色土 径2cm以下の焼土粒・炭化物微量。粘性・しまりやや強。
- ③暗褐色土 粘性・しまりやや強。
- ④褐色土 径5mm以下の炭化物・白色砂礫含む。粘性・しまりやや強。
- ⑤暗褐色土 径5mm以下の焼土粒・炭化物微量。粘性・しまりやや強。
- ⑥暗褐色土 径5mm以下の焼土粒・炭化物・白色砂礫・ハードローム粒含む。粘性・しまり強。
- ⑦褐色土 径5mm以下のハードローム粒含む。粘性・しまり強。
- ⑧褐色土 (②より明) しまり弱。
- ⑨暗褐色土 径5mm以下の焼土粒・ハードローム粒含む。粘性・しまり強。
- ⑩褐色土 径1cm以下の焼土粒含む。粘性・しまり強。

第45図 SB 5 (1)



第46図 S B 5 (2)



第47図 S B 5 出土遺物 (2)

S B 5 (第44~47図、表39~41、PL.13・35・36)

位置 S10・T10グリッド、東山南端の台地緩斜面上、標高約69.5mに位置する。西側はS B 6と重複し、北東にS B 7が隣接している。

調査の経過 第II層暗褐色土の精査中、当初単独の土坑と認定していたP 6が初めに検出され、その後北東方向に並ぶP 3~5、それと並走するP 1・8~10が確認されたことから掘立柱建物跡と判断し調査を実施した。また、P 1はS B 6-P 4に切られていることが分かり、S B 5廃絶後にS B 6が構築されていることが明らかとなった。

規模と形態 平面形態は桁行3間(6.2m)、梁行2間(3.75m)の掘立柱建物跡である。主軸はN-23°-E、桁梁に囲まれた面積は約23.3㎡を測る。柱間距離は、P 1-P 2からP 10-P 1という順に1.5m、2.27m、2.0

表40 S B 5 出土土器観察表

遺物No.	遺層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
84	S B 5-P11	土師器 坏	※13.2 △4.0	体部1/2	外面：体部回転ナデ、底部へら切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部押圧	密 1mm以下の石英、白色砂粒、マンガン等	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	良好	内外面赤色塗彩、胎土分析試料No.1
85	S B 5-P11	土師器 坏	※12.4 △3.8	体部3/4	外面：体部回転ナデ、底部へら切り後粗いナデ 内面：体部回転ナデ、底部押圧	密 1mm以下の石英、白色砂粒、マンガン等	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	良好	内外面赤色塗彩、胎土分析試料No.2
86	S B 5-P7 埋土	土師器 坏	※13.2 △3.9	1/5	外面：体部回転ナデ、底部ナデ 内面：体部回転ナデ	やや粗	外面：赤褐色 内面：赤褐色	良好	内外面赤色塗彩、摩滅調査、胎土分析試料No.4
87	S B 5-P9 埋土	土師器 坏	※13.2 △4.0	1/4	外面：体部回転ナデ、底部へら切り後粗いナデ 内面：体部回転ナデ	やや粗	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	内外面赤色塗彩、摩滅調査、胎土分析試料No.5
88	S B 5-P3 埋土	土師器 坏	※11.2 △3.0	1/4	外面：体部回転ナデ、底部へら切り後ナデ 内面：回転ナデ	緻密 1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	内外面赤色塗彩
89	S B 5-P8 埋土	土師器 高台付坏	底径※7.6 △3.5	1/4以下	外面：回転ナデ、底部貼り付け高台 内面：回転ナデ	密 0.5mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：明黄褐色	良好	内外面赤色塗彩
90	S B 5-P3 埋土	土師器 甕	※32.4 △5.0	1/10以下	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部へらケズリ	密 7mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	
91	S B 5-P4 埋土	土師器 甕	※36.6 △4.5	1/10以下	外面：ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部へらケズリ	密 2mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	
92	S B 5-P11	土師器 甕	※23.0 △7.5	1/8以下	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部へらケズリ	密 1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：明黄褐色	良好	
93	S B 5-P2 埋土	須恵器 甕	- △6.5	1/4以下	外面：格子タタキ 内面：同心円状当具痕、一部ユビオサエ	密 1mm以下の白色砂粒・マンガン	外面：灰白色 内面：灰白色	良好	胎土分析試料No.13

表41 S B 5 出土石器観察表

遺物No.	出土位置	層位	器種	石材	法量				備考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
S 25	S B 5-P 3	埋土	台石	安山岩	31.7	14.8	40.2	22000.0	上面に敲打痕